

明光社月並和歌の秀調を今日四巻まで選み終へたり
 今日も亦沿革史畫を染めんとし午後より月光寮に入りけり
 沿革畫三枚描きし折もあれ涙骨氏一行來郷の報あり
 取り急ぎ又も二枚の沿革畫染筆終りて神苑に歸る
 高天閣歸りて見れば涙骨氏岡田氏外に三記待ちをり
 肩凝らぬ話に時を移しつ、六時の汽車にて歸京されたり
 樂燒を記念の爲に一箇宛一行五氏に贈りけるかな
 穴太より齋藤氏夫婦わざ／＼と新夫婦連れ挨拶に來らる
 四方の山かすむが如く煙る如遠さかりつ、風冷えにけり

東京より大崎正吉翁來り秋山氏の談傳へてぞ行く
 日出處は祖母危篤との電報に明朝歸岡と電話ありたり
 臺灣ゆ河津雄氏遙々ど今日天恩郷に上れり
 黄昏れて數十餘名の修行者に高天閣にて面接を爲す
 青訓の嗽吠の清く響く宵庭樹の梢に吹く風冷えたり

天地は新たに春を産み出して森羅萬象に瑞氣を給へり
 高殿のおぼしまに立ち眺むれば花明山かざる山櫻咲く
 この春は宗教博を幾度か訪づれば花に樂しまんかな

○ 作 歌 夏 (八首省略)

○宗教大博覽會大本特設館より

三月廿九日 (第二十二日)

朝より曇り勝ちの上に時々雨が降りだし、參觀者の出足がきづかはれる。

入場者の中には大本館を大本館とおもつて入り来るもの、又大本館を宗教博覽會の入口と思つて這入つて来る人などもある。大本を理解した人や未だ誤解して悪感を以ちて觀覽に来るものもあるが、いづれの人々も館内を一巡して出る時には餘程感動してゐるやうである。入場者は最初入口の大達磨像の軸や大筆に驚かされてゐる。

▲批評とリ

- 一、僧侶二人が大達磨像を見て『實にうまいね』
- 二、洋服姿の五十歳前後の紳士四五人が館内を一巡し乍ら、『實に出口氏はえらいね。ようもこれだけのものが出来たものだ』

と感心してゐる。その側でしきりに色々説明して居た人があつた。後で聞けば綾部町長とか。

◇三月二十九日、中外日報所載記事

ヘゲモニー欄

△「政治的問題として宗教を取扱ふのでなくては宗教批判なるものは徹底しない」と本莊氏は言ふ。取のこされた形骸、捨てようとする塵のみを捕へてその塵の不潔さ、不意味さを攻撃しようとするマルキストにのみさういへる議論であつて宗教それ自身が政治的問題としてのみしか宗教批判が出来なければ大本教のみが光りさうだ。

三月三十日

於高天閣

彌勒殿大懸額の指揮すべく歸綾の用意朝より爲したり
 光照殿朝湯にひたり窓外の雀の聲聞く春の長閑さ
 京都府警察部長の來訪と聞きて歸綾の豫定繰り延ぶ
 東北に出張したる宇城宣使大祭に就き今日歸郷せり
 壹岐對馬宣信六十有餘名吾も加はりて小照を撮る
 北海道宣信一行高天閣玄關に立ち小照を撮る
 急用の爲に豫定を變更し部長は來らぬ事となりたり



徒信宣の馬對と師聖の前門月瑞

珍らしき筍持ちて中井五雄氏三嶋の宿を立ちて來れり
形原の宮のかたへの京柳目醒むるばかり若葉もえたつ
早咲きの櫻一本龜岡の春をうたひて簾かけに笑む
何國の人かは知らず自動車を乗りつけ雀の紳士參觀す
萬朝報記者遙々二人まで天恩郷に上り來れり
桃三箇やつと貰ひて吳々に洋服姿歸りてぞ行く
三雲夫人松田夫人と入りきたり歌の短冊貰ひてぞ行く
難波より内藤長井兩宣使宗博歸りに立ちよりにけり
くれくやかせくもろく其の外に又此の頃はかへくが來る



高天國女團舞師と北海道より参詣の宣信使

くれくの防禦のために受付子春の長日を頑張り暮せり
明月が雛祭して見て呉れど今日三度まで誘ひに来し

朝夕に見なれてみれば世に稀な美人も普通の女なりけり
容貌は第二次として村肝の心を選む吾となりけり

○作歌夏(四十四首) 雜(四首) 省略

○内藤老へ

天窓照す身魂の豆な正照氏まめやかなれと支那豆贈れり

○長井良胤氏

玉の緒の生命の長井宣傳使贈れる酢司の味も良胤

明月に招かれ神明館に入り豆人形の雛祭り見る
さ、やけき雛段つくり豆人形祭りて人を酒に困らす
女てふもの、心を今ぞ知りぬ身魂相應の雛祭りみて
豆雛も意志想念の伸長に宇宙大とも見ゆる神苑
豆雛に糸より細き蠟燭を手向る女のほそながきかな
獨り居の宿を訪ねてせりばしい一人の跡をあたり追ふ
まだ花は咲かねど豆雛祭りたる後家の住居ははるこ、ちすも
おた福の櫻の咲く日を待ち侘ぶるこれ夕暮の雛祭りかな

野良猫が首出したやうなスタイルで馬術々々馬穴言ふなり
 三千歳の春を迎へて桃の酒明月花月に酌む夕べかな
 明月の館に酒くむ桃の花月のこよみは三月ついたち
 大本の事ありしより今日までに三三三三日を経たりけり
 花と月春のあるじと仰ぎけり
 春長き雲井に匂ふ櫻かな

○作歌 春興の部(五首) 冠句(三句)省略

黄水仙匂ひたりとて農園の徳風高天閣に持参す

綾部より送りし松苗三百五十今日農園に植込ましめたり
 ゆく／＼は理想郷をば造らんと今より種々の樹苗植込込む

◆三月三十日発行 校友會誌「鶴陽」掲載記事

誤解されたる大本敬

出口聖師は古今無比の神格者

京都府下龜岡町
 大本編輯課

富士津日水勇
 (舊藤津進卅回一部卒業)

はしがき

眞宗の寺に生れた私、學校時代から佛教の講演聞きに不時外出を許された
 私、教壇に立つてホケツトには何時も念珠を入れてゐた私、三池郡教育會の
 境上で教育は信仰を基調としてなさればならぬとて親鸞を叫んだ處、南無阿

彌陀佛とさゝやかれたる私、其私が大正七年十二月大幸田毎日新聞に「教育家より豫言者へ」との見出しで綾部の大本行を披露された時、知友の眼は、一種異様に輝いた事を想像します。尤も其時代は大本の存在は今日の如く世間には知られない頃でありました。爾來鬼と、栗と、猿とで知られた丹波の山住の十三年を經ましたが、其間會員として此の地で御目にかゝつたのは恩師の永好新八先生と大橋利基氏及び白木茂三郎、馬場豊二の兩氏に過ぎなかつたのであります。音信としても以上の諸氏の外二三に止まり殆ど顧られない状態でありました。是は畢竟金蘭簿に大本教の名を冠つて第三十回卒業の中に妖魔の如く只一人目をむいてゐるからであるか、但しは觸らぬ神に祟りなしとの考へであつたかは知らぬが、多少人間味を持つて居る私としては母校を偲ぶ時、故郷に思ひの走る時、會員名簿に目をさらす時、何となく淋しさが胸に湧いて來るのであります。然し省れば是は決して無理もない事では迄特別の遭遇であればある程會誌を通じてゞも御便りすればよかつたのですけれども、只一二度の編信の發表位では結局當方の不調法と御詫びするより外ないのです。何はともあれ今後何分宜敷御交誼を改めてお願い申上る次第です。

○ 「私儀今般皇國の危機に際し、心身修養上寸毫の時日もゆるさず、やむなく退職致し度候段御願ひに及び候也」

これは私の當時の退職願ひでありました。火の様に燃え立つた私の信仰は骨肉と斷ち、知友と別れ、職を抛つたのであります。全く捨身其物の心持を以つて報國盡忠、兵士の戦場に臨む感があり、世情の顛るべきを捨て、微笑んで水中を水中とせず飛び込んだのであります。此の精神は今日と雖も些の動搖なくひたすら國家安泰を希ひ、身を以て公に奉ずる一心は私の現在を將來の光明へ導いて居るのであります。よくも、大本にそれ迄呆けたたと云はれる方がありませうが、先達て來られた福岡出身の頭山滿翁が「此の大本の團體ある事によつて、私は死んでも思ひ残すことはない」と言はれた事に依つても、内田良平氏が「今後私の事業は大本の神業を離れてない」と言はれた事に徴しても大本の如何なるものが略窺はれる事と思ひます。

○ 大本と云へば先づ世の中では大正十年の事件を思ひ起し、出口直子刀自の紙屑買ひを想ひ、出口王仁三郎聖師のえ体の知れない人柄を想起するであらう。さうして清淨無垢の神人、無限の智慧と無量の靈力と、無邊の慈愛を包

蔵する聖雄であると云ふ事は頭のどこを捜しても見出せないのが世間一般の大本に對する感情であらう。それ程大本は世間から誤解されて居る。近時金石文字の大家達が大本教祖即出口直子刀自の筆蹟(お筆先)を見て、神人ならでは書き得べからざるものとし、彼の小山内薫氏がお筆先を評して天下の名文だと稱した事に依つて世間の一部の耳目を聳たしめた。出口聖師の作品展覽會が全國の各地に於て開かるゝ様になつてから、「悪心の一点だになき作品」「専門家の我々の企及すべからざる樂燒」「學ばずして諸流の奥義を表現してゐる繪」「一点の遲疑なく、此の大膽さは捉はれて居るものには出来ぬ」「神ならざれば成し得ざるもの」等々の識者の批評を聞いて居る。凡て其筆蹟作品は其人の性格を現はす事は多少其道に入つて居る人であつたならば了解出来る事であつて、今後此種の催がある事に依つて世の識者には大本の如何なるものか判つて来る事と思ふ。

出口教祖は如何なる人であつた、出口聖師は如何な方であると云ふ事が明瞭に判つたならば其人は大本を了解した人である。

出口教祖には國常立命が此獨世を救はんが爲に神懸らせられ一大獅子吼をされ、世界に人倫の範を實行に依つて示された。と云つても世人はそんな高い神、世界を自由にされる神が貧困の一老婦に懸らるゝ筈はない等と自分の

頭で片づけてしまふ人があるであらう。處がさう簡單にかたづけられるゝ問題でない。我等は肉體あると同時に肉體を守護する神の分靈を賦與せられてゐる。さうして此の肉體あるが爲に種々の慾望が起り、其慾望に囚はれて神の分靈たる各自守護神の本來の使命を忘れて居る。此の世の亂れて居るのも結局是に起因して居るのである。現在の世に生活して居る人で物質的執着のない人は先づ少ないであらう。教祖は云ふに云はれぬ家庭的にも生活にも赤貧のドン底に墜ちた刹那と雖も神と共に在る精神は忘れられなかつた。そして生活の全部を神に任せて自己の最善を盡された。丁度神より賦へられたる精靈の活動されるに格好な身となられた時(五十七歳)神感に接し教祖の肉體は神の自由自在に使用される様になつた。爾來廿有七年神と共に其なる活動は生き乍らにしての神であつた。從來人間は神とか佛とかの解釋を吾々人間とあまりに遠きものとしてゐたのであるが、神は吾等と離れて此の世界に活動さるゝことはないのである。されば吾等も心得次第では生きながらにして神の活動が出来得るのである。又教祖の神懸にしても之が善神であるか邪神であるかは、其言行及記述等に依つて判別が出来るのであつて、近時泰西諸國に於て神靈の研究は漸時盛んになつて來てゐるが、我等も此の靈の活動なくしては一刻と雖も生きる事の出来ないものである。然して天下國家、人心の

救済を主とし、私利私慾に墮せず、活動するものは善靈であつて、私利私慾に捉はれて小なる慾望の爲活動して居るものは悪靈である。教祖は是等の事に就いて深甚の注意を拂ひ極力審神につとめ、遂に明治三十一年出口聖師の來ると共に其正しき神の此の世界に重大なる使命を帯びて來たられたる事が解つたのである。

私は入信以來佛敎の家に生れた關係上幾多の注意を拂つて大本を見て居たが、出口聖師の古今無比なる神格者なる事を悟り、生きたる彌陀とも釋迦とも、孔子とも、基督ともたとへ難き神人なる事を確め得てゐたが、先般來られた頭山翁は「聖師には無限の智慧と無限の愛とがある」と稱せられ、支那の嘗て國會議員であつた侯爽素氏は「聖師の胸中に百萬の經書あり」と嘆じた事も宜なるかなと思つてゐる。元來出口聖師は今迄如何なる困難に遭遇するとも是を念とせず是を突破し、如何なる敵と雖も是を撃つ事なく是を愛を以つて包み、如何なる難問題に對しても天來の斷案を下して總てを解決し、如何なる勞苦と雖も是を意とせず精力絶倫以つて事を處理し倦む事なく、常に神明の叡智を以つて將來の事業を判斷し、此の亂世に當つて世の行くべきを覺り其の羅針盤となり、六大神通力を神授せられて、現國神三界に通曉し以つて對者の心意を洞察する事明鏡其物の如く、天地一体の心意を以つて大

海水の如き天性を持す。

支那道院の神啓に聖師の神格を示されたる如く誠に東洋の明哲なるのみならず世界救済の大導師であるのである。かく謙しかく仰いでも日常其近側に侍するに其風格只茫漠として、迷ふれば却つて其本質を冒す無きやを懼るゝのである。つまり教祖の神示にあらはれたる凡ての事は聖師が其實行係として活動し完成さるゝのである。今迄既成宗教は天國、極樂を説いてゐるけれども、世が降るにつれて彼等諸先哲の希望は其遺弟に依つて完全に傷つけられ、經典は只空理空文として先師の偉業を物語る骨董品として残されてゐる。今の世を救はんとならば、釋迦基督より偉大なる人物が出現せなければそれ以下の人間ではどうする事も出来ぬのが現状であつて、然して過去の人物でなく現存する人に依らなければ遺憾なき救ひは得られぬのである。それで私の信仰は只阿彌陀如來への讃仰が、生きたる救世主へ轉換された丈けである。私の日常は此の神人の手足となり、自己本來の神靈的使命さへ果されたならば、私が此の世に生れ出でたる意義は全ふされたのである。否未來永劫の生命は得られたのである。又救世の大道を歩む事の世界に於て最尊最貴最大最妙なる事をも信するのである。

兎も角今迄の世間の誤解は此の二大神人を諒解する事に依つて大本の如何

なるものが氷解され、却つて今後の處世上の光明をもそこに認むる事となるであらう。

○ 先頃教化總動員の聲を聞いてから舉國一致思想善導の爲、宗家家達がムキになつて居るが、是は誠に結構な事であるけれども、宗教本来の性質よりして是を當局より叫び出されて躍り出す様では寧ろ教育家の恥辱、豫ての怠慢、教權の不健全を証明するものではあるまいか。更に考へて見ると是は少年青年に比較的縁の少ない宗教家よりも、初等教育家の方が直接關係ある問題ではあるまいか。

近時宗教教育の現下に急務なる事も一般に認められて居るけれども、是を實施するには各種の支障が起る事は火を賭るより明かな事實である。又實施せらるゝ様になつても、それは單に宗學的のもの、哲學的のもの理論的のものでは只概念を得る丈であつて、人間の中核になつてゐる靈魂には何等の關係なきものである。仁慈無限、己の爲でなく、金の爲でなく、位の爲でなく、愛は天地本然の大道なるが故に愛を施し善は踏むべき道なるが故に行ふ程の勇猛心があり利那々々の努力家が指導して初めて教化運動も宗教教育も其意志を貫徹する事を得るであらう。只各種の叫び聲はあつても、眞實に靈

魂を育てる人がなかつたならば、言ふべくして行はれぬ事のみである。敢て尋ぬる「吾等の死後は如何になるか」「此の世の中は今後一体どうなるか」「人生の眞の目的は」「神とは如何なるもの、それと吾等との關係」「敬神尊皇報國の精神にはどうすれば徹底するか」「靈とは如何なるものか」と。是等に對して明快なる徹底したる答をなす人が幾何あるであらうか、此の問題は人生殊に教育家にとつては須臾も閑却すべからざる問題である。我大本では是等の諸問題は云ふに及ばず、世のあらゆる諸問題に神明の斷案を下し、意義ある人生の誕生に努力してゐる。京都府龜岡には修業場があつて全國各地から、政治家、實業家、教育家、軍人等あらゆる階級の人が集まつて道を求めて居るが、一週間の講話に依つて靈魂の實在を確認し、信仰の中心を掴み人生の本分を体験し人格の轉換を行つて居るのである。

○ 今迄嘗つて申し開きをせなかつた私が斯く同窓諸彦の前に所信、環境の一端を披瀝した事は一に時機の然らしむる處でありませうけれども、一方に於ては少なくとも諸彦の心底に誤まられたる觀念が潜んで居たならば、目下天下の問題となりつゝある大本に對する見解を違へ、隨つて彼我の害なるを憂へ其片鱗を逃べて茲に私の微意を表した次第であります。(をばり)

三月三十日 雑誌「光明」掲載記事

宗教博覧會を觀て

山 元 春 江

古い都の春「神社佛閣の多い京都の土地に宗教博覧會」新聞紙上に載つてゐた西洋の地獄の寫眞版そんなものを見た私達には背有つた地獄極樂の鏡掛けなどが連想され、とても馬鹿々々しいものだらうと見ない前からそんな風に話題に上つてゐました。

二三日前に或有名な博士から「大本教などつまらないものだと思つてゐたのに意外に眞面目で陳列されてあるものにも秩序があり、かなり充實してゐる点は全く案外でした」といふお話を聞きまして急に一度往つてみる氣になりました。翌日出かけてみますと、折からの日曜日であつたせいで、随分な人出で、入口など幾十人の列を作つてゐるのには先づ驚かされました。そして入場券を見ますと一冊の回数券の様になつてゐまして、由緒ある京都の寺院の多くが開放されて拜觀の便宜が設けられ、會場としては第一、第二

勸業館の外に知恩院を第三會場とされてゐるなど、地方のお客様達の爲にも京都市の繁榮の爲にも極めて時期に適したよい催しだと思はせられました。先づ入口の右手に大本館とされた一つの建物が新設されてゐます。その正面に彌勒菩薩が山と山との間に大きく描かれて王仁とサインされてゐます。次に海外に於ける大本教の提携団体の事や猶海外へ宣傳の印刷物其他海外各地よりの大本を求むる書狀が地圖と共に極めてわかりよく陳列されてゐます。其他教祖の一代記を描かれた幾十幅の王仁とサインされた畫幅、綾部と龜岡との大模型など色々な方法に依つて大本教のどんなものであるかといふ事を未だ知らない人に示す方法の最善がつくされてゐます。又所々に書かれた短い格言の中にもいゝものがありました。次に人類愛善會の仕事についてもその主義主張とする大理想や現在世界の各地に向つて何をなすかあるかといふ事が整然と熱心に示され説明されてゐます。人種的に差別をはなれてなれる世界人類の愛善はたとへ現在の状態がそのほんの一步でありましてその主張は良い事だと思ひます。中央の空地に色さまざまの美しいシネラリヤその他の花を一ぱい植ゑて地上樂園の希望を表したあたり如何にもうれしい明るい感じがしました。大本館を出て次は此博覧會第一の呼び物、佛教の催しであります。

第一入口正面の松坂屋の出品である美しい天人は如何にも春らしい平和な情緒があります。それを過ぎて西北館賣店側に依つて佛壇や木魚の並ぶ中を通りぬけて西南館に立入りますと西國三十三ヶ所の大模型、その一隅におばアさん達が集まつて鈴をふり聲高らかに御詠歌の聲を聞きますなど他の博覧會では見られない情景です。

南館の中央が極樂のバノラマ張りぼての印度の格式をまねた入口、内部も同じ格式のボール紙に描かれた建物を重ね、之も紙に描いた天人、あみだ如来を上から針金でアラ／＼吊り下げ、みすぼらしく描かれた多くの群衆がそれを合掌禮拜してゐる情景です。前面に紗を張つて幾分ボンヤリと見せて趣きを添へてあります。こゝを過ぎますと「西洋の地獄」書いた立札が有り狭い張りぼての岩窟の中に追ひ込まれます。急に陰鬱なまつくらな澤々と立ち昇るほこりの中に泥繪具の惡臭が鼻をつきます。

かれこれ十間ほども行きますと、極めて薄暗い照明をされた窓のやうなものがあります。その中にやはりボール紙に描かれたものを重ねて作られたバノラマ式の所謂地獄の場面があるのです。欺瞞罪、美食罪、奸淫罪その他何々罪と数々の罪惡の場面が次々と並べてありました、中には随分大きい設備をして照明の様式火焔のものすごさなどになか／＼意を用ひて實感を表はす

様に工夫してありましたのは流石で、時代の影響をうけた技巧の進歩だとなづかぜられました。この氣味のよくないほとりのトンネルから開放されて出ますと、あとはもう普通の賣店です。

一方に佛教徒の催しが陰慘な地獄の宣傳に全力をつくしてゐるのに對して大本教信者のすべては樂天的で地上天國を理想とする明るい感じを出さうとしてゐるなど、一寸何等かの對照の妙を得てゐる感があります。

次に第一勸業館の宗教館を見ました、此處には佛敎の各宗派の儀式用具が陳列されたる外、大谷光瑞氏のチベットの敎典など、さすがに見るべきものがあります。

其他キリスト敎の日本に於ける歴史的な史料即ち明治維新前後の信者の所藏されたるキリスト、マリヤの像や十字架版畫など私共にとりまして參考になる尊いものを見る事が出来ました。最後に天草の亂の聖徒の殉敎されたる人達の畫像の前に立ちまして靜かにその一枚々々を敬虔な心持を以て丁寧に觀察してゐますうちに、自ら涙ぐましい思ひでその時代を追想して、全世界のキリスト教徒の將來に幸多かれと祈りつゝ歸途につきました。

平和會議、軍縮會議その他最近世界の平和の爲にする多くの數知れぬよき會合や事業が世界の各地に度重ねられ、一路平和に向ふよるこばしき半面と

又その裏面に益々強張せられたる排他的な國家觀念、混沌たる思想問題、世界各國に於ける道徳標準の相異など、全世界の平和に反する一面も益々深刻化してゐます。

過去は己に神の御手に返し現在も亦過去の最後であり、共に我々の自由にする事も出来ない事實であります。そして只残された未來こそ人々の自由の開拓する事の出来る境地なのです、そしてその一つの未來の爲にお互に最善をつくし、藝術も宗教も亦科學も産業も學術もすべてあらゆるものが一致協力し唯一路世界平和の爲にのみ全力をあげて進みたいと痛切に考へさせられました。

三月三十日 萬朝報所載記事

大本とは——天地の祖神を祀る

平和と幸福の神世界

仁慈無限の神示に奉仕す

大本とはどんな所か、と極く簡単に云ひますと、

天地の大祖神を奉齋し、神示を普く宣傳して、仁慈無限の御教により永遠に平和と幸福とに充てる神の世界を實現さるゝ未曾有の大神業に奉仕させて頂く所……であります、それで、

一大センセーションを

捲き起した大本教

ひろく世界宗教の聯合に盡す

王仁三郎氏の活躍

大本教と云へば往年破竹の勢を以つて宗教界の一方に猛烈として威容を現出して、惱める幾萬の大衆を接してこれに集まり、世間これへ向けたる驚異と好奇の眼は、やがて、その勢を増すにつれて、邪教呼ばはりに變り、果ては不敬事件で訴へられる等の活動振りに、沈潜してゐた宗教界の空気を刺戟して、社會に一大衝動を興へたことは、普く世人の記憶に残る處である。然し今は受難と試練の時代を過ぎて、専ら内部の整済と充實に力を注ぎ、すべての施設の上にユトリある姿をガツチリと据ゑて宗教界そのものを象徴するかの如く重厚味をたゞへて来た。然し大本教の黄金時代は、アノ邪教呼ば

はり、不敬呼ばりされたる時にあるのであつて、ともかく朝野相識の人士が競うて大本教に入り、更に雲霞の如き大衆がわれも〜と綾部に押掛けたのだから驚く、加之一方には新聞界への抱負を持つて東洋一を自負して、傲然たる朝日、毎日の二大新聞を向ふに廻し、巨額の資本金を擁して大正日々新聞を經營し、この兩大新聞の心膽を寒からしめた事も痛快な話であつた。京都警察部が決死隊を組織して大本教を逮捕に向つたり、なか〜の劇的場面などもあつた。かうした烈しい受難は、いづれの宗教でもその誕生、創成の時代に蒙つたもので、ひとり大本教のみではないのだからそれを以て單に大本教を邪教呼ばはりしたり、ケナシたりすることは甚だ淺薄なる立論である。云はなければならぬ。大本教が世に生れてから、卅五年の月日を過ごした開祖たる出口直子刀自が八十三歳の高齡を以て神に召されてから今教内で『聖師』と尊稱されてゐる出口王仁三郎氏が、二代教主澄子女史を護り立て、大本教の爲に奮闘されて居る事はよく世人の知る處である。王仁三郎氏は本年で六十三歳であつて、その心境はます〜神格化して、またその趣味の優雅にして多方面に涉り東京の上野に催されたる同氏の趣味個展の如きは、實に三味境の揃すべきものが多々あつた。客年は遠く支那蒙古等に遠征し蒙古に入りては神軍を起して諸人を啓蒙し、爲に危く一身の害にも逃ふ所であつ

た。然しこの行によつて支那の宗教徒等と握手し、また世界宗教の聯合を策したり、なか〜に活動してゐる。三代目を日出磨氏と云ふ。

精神界の文明を

開發せよ

出口王仁三郎氏談

今の世は物質的文明の壯年時代とも稱すべき時代にして、鐵、石炭、電氣などの利用によりて、交通機關の完備し、坤輿を縮少せしめたること幾千里實に便利極まる聖代とはなりぬ。

◇
されどまた翻つて一方より社會の裏面を觀察する時は、未だ以て完全なる文明社會と思惟するを得ず。何ぞや？ 人々の精神界の暗黒なる事これなり人々の精神界の文明を開發し以て世界の平和と進歩を計るは皇國本教の主旨なり。

精神的文明を普く布教して、天下の幸福を増進せんとするには、まづ皇祖皇祖の始め玉ひし祭祀の道を盛んならしめざるべからず。

人は道に依りて、生くる者なれば、その精神も日に月に進み行くものなるに、きはなくして、その反對なるは、そもく、又なんの理由ぞや。これまつたく、成り成りて、成り足らばす處の、神ながらの命の道に遠ざかりて寂滅爲樂、狂妄の邪道に陥りて未だ眼覺めずその場の慾に心奪はれるが故なり。

今の世は精神のみか、身体までも古人に若かず、大いに退歩しつゝあるなり。これまた皇道に反するが故なり。

皇道とは御國の本教なり即ち祭なり、教なり、慣なり、造なり。萬世一系の皇上を心底より崇敬し産興業を勵み、本教によりて、人の本分を覺り、以て國家の富強を企圖し、決して邪教に迷はず、因縁因果の道理を捨て自力を養ふべし、これ日本帝國に住める者の將に盡すべき本分なるべし

神示を基とする

大本教の根源

その重なる十大教義

- 一、主神(天地の大祖神)の御神格及愛善と信眞の徹底的理解
- 一、日本國民天來の職責
- 一、惟神の大道と無理だらけの人間理智との差
- 一、死んでから後の事や人生の意義などを説き明かし
- 一、今の世の間違つたやり方、例へば利己主義とか、科學萬能とか又は神靈を輕視して物質を偏重したり……等の体主靈從の物質的教に迷はざること
- 一、どんな事でも神様の大御心にお任せ申し、過去を悔み未來を案じ煩ふ事なく、安心して只與へられた利那を喜び樂しみ、御神慮に従ひて最善を盡す事
- 一、水や火やお土等の天地の御恩限りなき神様の御恵みを悟り、常に感謝祈願の道を忘れざること
- 一、自己を省み、世の中の事は總て善意に解し、謙讓と雅量とを以て相對し常に善言美詞を用ふること
- 一、どんな難儀に逢つても、誠の道のためならば少しも恐れず、誠を以て切り抜けること
- 一、社會のために全力を盡し、天下救済の神業に奉仕することなどの實行と宣傳につとめ、御神意の實現のため實際的に大活動をしてゐます。

神様は時代相應、場所相應に神社をたて、豫言者を出し給うてゐたのであります。然るにそれが年を経ると共に、どの宗教も教祖の眞の教を取違ひして只形ばかりが残るやうになつたのであります。

大本は現代に應じて現はれた活きた宗教でありまして、永い／＼問世に落ちて藤からこの神國をつぶさぬ様に御守護下さつてゐた所謂鬼門の金神、元の國常立尊様、坤の金神（姫金神）元の豊雲野尊様、其他の天使様達が今度いよ／＼表に起つて御守護なさるについての御教であります。即ち今までの世の中にはまだ眞の親神様がすつくりお表はれになつてゐなかつたのであります。世の中が盲くゆかなかつたのも無理はありません。大本開祖のお筆先にも『天理、金光、黒住、妙靈先走り、良に良の金神が現れてこの世の守護を致すぞよ』とあります様に、今までの宗教は大本によつて始めて眞の光を興へられ生命を興へられるのであります。ですから東西古今を通じて、大本ほど其神力の強い教はありません。これは決して誇張ではありません。毎日の事實が證明して居ります。第一開教以來僅かに三十五年ほどにしかありませんがその間にこれだけ發展をしたのであります。これは綾部と龜岡との神屋敷だけを一巡御覽下さつても解ります。それで大本では奇蹟的事實は餘りにありすぎるので、少々の事を吹聴する

のはバカ／＼しい位です。

人間は死後も決して烟のやうに消えるものではなく、その人の心と行に積んだ善相應の天國なり地獄なりへ必ず行つて生活するものである——といふことに就いても、今までの宗教ではどこやらアヤフヤとして不確な所がありますが、大本では靈眼の利く人も澤山あり、又生てゐる間に天國や地獄へ行つて来た人も少くないのであります。併し眞の神様の御教は無暗に人を恐がらせたり、叱つたりして、どうせねば罰があたるとか、斯うせねばいけないとか七むづかしい事を強ふるものではありません。大本の教は一切を喜ばせて助け育てる教であります。本氣で『大本皇大御神様』とさへお願ひすればどんなものでもお救ひ下さる神様であります。決して罰は當てぬ神様であります。お祈りする者の一切の罪けがれは教の神社 出口王仁三郎聖師及二代三代教主様が悉くお引受け下さるのであります。そして之等の方々が日夜病人同様にお苦しみになつてゐられるのであります。何事も論より證據であります。今までの宗教とどれだけ違つてゐるかといふことは一度御來しになつてみればよく解ります。

○現代の活宗教

開祖出口直子刀自

京都府福知山町の生れですが、綾部町の出口家に來られたのであります。大本の起源は、明治二十五年正月元旦、當時五十七歳の寡婦であつた開祖の神懸りに始まつてをります。開祖の神懸によるお筆先の中には天地の創造、神々の因縁、靈肉の關係、救世主の出現、世界の豫言、世の變り目に際して我等人類の心得べきことから、其他日常生活上に關する教訓等に充たされてをります。

あらゆる困苦と闘ひ、二十七年間嚴寒酷暑の差別なくよく神に仕へた開祖は、その晩年に於ては實に生神であつて、髪は雪の如く白く皮膚は大理石の如く滑かで、何ともいへぬ神々しさでありました。開祖は大正七年舊十月三日八十三歳で昇天されました。

聖師出口王仁三郎師

京都府龜岡町の西北曾我部村字穴太の人で、貧困なる家庭に成人され、幼時より神童といはれて異常な靈能者でありました。二十八歳の時高熊山（南桑田郡曾我部村にあり）の岩窟に靈的修業をなし、その修業中神様より、世界の組織、未來の出來事、師の救世主たる自覺、世界改造の實際的教訓等を鎮魂歸神の神法と共に授けられたのであります。これらのことは何れも師の

口述にかゝる神書『靈界物語』（目下第七十二卷まで出版）中に收めてあります。師はこれより専ら神の道を開いてをられました。神示のまに、明治三十三年開祖の第五女澄子刀自（現二代教主）と婚ひて大本の人となられ今日まであらゆる内外の誤解、迫害、壓迫、熱罵、嘲笑の中にあつて撓まず屈せず人類救済の大神業の爲に盡してをられます。今や時期到來して、

瑞靈眞如聖師

として救世済民の大舞臺に活動される事になりました。師の御口述にかゝる『靈界物語』は稀代の神書でありまして、物語式に至つて平易に神界の密意、教の眞諦、過、現、未の歴史や豫言等が織り込んであります。

○大本の現状

大本瑞祥會

大正十年以來批難、攻撃の連續する間にも、教風を慕ひ、神徳を仰いで參ずる者日に多く奉仕團體たる『大本瑞祥會』の分所支部は三府四十三縣は勿論、北海道、樺太、臺灣、朝鮮、滿洲遠くはアラジル、メキシコ其他に亘つて總數五百八十六ヶ所（昭和三年四月十日現在）となり、事件當時に比

して三倍強となつて居ります。

海外宣傳部

大正十三年エスベラントに依つて世界宣傳を開始した結果、海外諸國より大本を求むる者頗る増加し、目下エス文月刊雜誌 *Oomoto* を發刊して之に應じてをります。大正十四年瑞西セネバに於て開催せられたる第十七回萬國エスベラント大會には大本より出席したる代表員は副會長に選ばれました目下巴里に人類愛善會歐洲本部を、スイス、イタリー、アルガリヤ、チエツコスロヴァキア、アラジル等に其支部を設置し又大正十五年一月より巴里に於て外字新聞 *Oomoto Internacia* (國際大本) を發行しました。そして人類愛善會の趣意書はエスベラントを始め英、佛、獨、チエコ、丁抹その他の國語に翻譯され、續々各國より入會申込をなし來つて居ります。

天聲社

綾部及龜岡に本社並に支社を設け、和洋印刷の設備完備して、山陰隨一の印刷工場として大本神教宣傳用印刷物の發刊及一般の註文に應じて居ります

明光社

巡教に、建設に寧日なき聖師は尙文藝獎勵の爲、龜岡天恩郷内に明光社を設立し、冠句、和歌、瑞句等を獎勵し、自ら選者となられ景賞として、巻、色紙、短冊等を出されて居りますが、選句数は冠句丈でも毎月數萬句以上にも上る盛況であります

大本教の聖地

綾部と龜岡

毎日午前午後に説話があり

境内さながら神の國

山陰本線龜岡驛(京都から約五十分)にて下車すると大本天恩郷と云ふ道場がある、これは龜岡城の舊跡に設けられたる對外的布教の總元締、も云ふべき所で、大抵毎日午前午後説話があり、若し大本教に關する質問等の場合には丁寧に答へてくれる、突込んでわからうと思へば四五日滞在して聞いて見ると大概納得がゆくとの事である。一般の参拜者にも希望によつては講話もするし、境内の案内などなか／＼行届いた待遇をしてくれる。大本教に行つて修業しようとする人達のためには專屬の宿舎があつて宿泊料は一泊

三食附壺程度でやつてくれる。そしてこの龜岡の修業を終へると、今度は總本山とも云ふべき綾部へ詣ることになつてゐるが然し一般の人々はどちらでも自由に参拜が出来るわけだ。龜岡から綾部までは汽車でちよつと二時間位かゝるが兩方とも流石に大本教の根源地だけに、建築物の莊嚴なること境内地の静閑清淨なること等、神の國を偲ぶに充分である。

理想郷社農園

自給自足の第一歩として且つ又農事を奨励し天下に範を示すべく龜岡の理想郷社を譲り受けて農園を拓き、綾部にも亦天王平の下に水田等の耕作をして居ます。

他宗教団体との提携

支那の道院、朝鮮の普天教、獨逸の白旗社との提携の外に、先年北平に於て『世界宗教聯合會』を主唱し、在支各國宗教界の權威を網羅し、その東洋本部を京都府龜岡町天恩郷光照殿内に設置してあります。

○ 人生のなやみを救ふ光明は三世貫通の大本の教

みろく大祭 (春季大祭)

- 一、期日 四月一日より五日まで五日間
- 二、場所 京都府綾部町及び龜岡町の兩本部
- 三、みろく祭は大本三大祭 (節分祭、春季大祭、秋季大祭) の一で例年内地各地方は勿論遠く北海道、臺灣、朝鮮、支那、滿洲方面よりの参拜者萬餘を數へ殷盛を極めてゐるが、今年は京都市に於て開催中の宗教大博覽會と後記寫天閣落成式の關係上参拜者も例年に數倍する見込であります。

寫天閣落成式

- 一、日時 四月二日午前九時より
 - 一、場所 京都府綾部町本宮山頂
- この寫天閣は去る大正十年の所謂「大本事件」の際、取毀された建物(拜殿等)の用材を用ひて昨昭和四年五月新たに工を起したもので、大本獨特の建築様式により二階建の莊麗な建造物で二階は大本發祥以來の記念寶物の陳列に宛てられることとなり恰度大祭中でもあり参拜者も多く稀有な盛大さを見せることゝ豫想されます。

大本宣傳歌

朝日は照るとも曇るとも
たとへ大地は沈むとも
誠の力は世を救ふ

x

三千世界の梅の花
開いて散りて實を結ぶ
この世を救ふ生神は

x

神が表に現はれて
この世を造りし神直日
唯何事も人の世は
身の過ちは宜直せ

月は盈つとも虧くるとも
曲津の神は荒ぶとも

一度に開く神の教
月日と土の恩を知れ

高天原に神集ふ

善と悪とを立別ける

心も廣き大直日

直日に見直せ閉直せ

◇同月同日 萬朝報所載記事

北河内菅原村に

王仁神社建設

來月八日午前十一時から同地で

報告祭と地鎮祭舉行

王仁神社建設については、山崎、内田良平、林市藏、白川朋吉、太田光熙の諸氏がかねて出願中であつたが昭和三年十月十五日附内務大臣より大阪府社として許可指令が出たので爾來着々準備を整へてゐたが此の程漸く準備も完成したので、大阪府下北河内郡菅原村大字藤坂字奥伏山二千五百三十番地に建設することになり來る八日午前十一時より同地に於て奉告祭と地鎮祭を執行すると。尙博士王仁は百濟の人、紀元九百四十四年人皇十五代（今を去る一千六百四十三年前）應神天皇十六年に我邦に來貢し、論語千字文等の漢書を献上し帝の二皇子の師傅としての偉大なる功績は小學校の教科書にも特記せられてゐる程である、その二皇子互に位を譲り合ひ三年の久しきに及んだ美徳は實に博士王仁の調陶に基く造詣の發露と言つてもよく、殊に『高き

やに登りて見れば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり」の如き仁徳帝御一代の古今稀なる御徳政は全く外臣歸化の人博士王仁の献替輔弼の宜しきを得たが爲めである。

◇三月三十日 京都日出新聞所載記事

大本瑞祥會が

みろく祭

來月二日には

穹天閣落成式

京都府下龜岡町大本瑞祥會では來る四月一日から五日まで綾部及び龜岡町兩本部でみろく大祭を執行し、四月二日午前九時から綾部町本宮山頂で穹天閣落成式を舉行するがみろく祭は大本三大祭の一で例年全國から夥しい参拜者がある、穹天閣は大正十年の大本事件當時取毀された拜殿等の建物の用材で昨年五月新たに工を起し今回竣工を見た二階建の莊麗なものである。

◇三月三十日 中外日報所載記事

大本の大祭

四月一日から五日間

大本教の春の大祭で全國の信徒が綾部の本部や龜岡に殺到するみろく大祭は來る四月一日から五日間執行される。本年はこの大祭の第二日には去る大正十年所謂『大本事件』で官憲の力でたゞき毀した綾部の本宮山上の神殿のあとにその毀つた用材をそつくりそのまま、で昨年五月來穹天閣といふのを建て、居たがこれが完成し落成式をあげる、一方京都では岡崎公園に大本が先輩各宗教を蹴飛ばしたやうに優勢に宗教博に出陳した、それを觀に來る者等が多くて非常な賑ひを呈すであらう。

◇三月三十日 北國夕刊新聞所載記事

大本教の

みろく大祭と

穹天閣落成式

京都府綾部町及び龜岡町の大本兩本部では来る四月一日から五日間大本みろく大祭が開催されるが例によつて内地各地方は勿論遠く北海道、臺灣、朝鮮、支那、滿洲あたりからも萬餘の参拜者を見、殷盛を極める事であらう。それに本年は京都市に於て目下開催中の宗教博覽會があり、綾部本部では、さきに大本事件によつて政府が取毀ちた本宮山上の拜殿の用材を用ひて大本獨特の建築様式によつて建設された莊麗な穹天閣の落成式が二日午前九時から鶴山山上で執行されるので一層の盛大さを見る事であらう。

三月三十日 關西日報所載記事

みろく大祭

大本教本部では四月一日より五日まで京都府綾部町及び龜岡町の本兩部でみろく大祭を執行し此の機をトして綾部本宮山頂に建立の穹天閣落成式を舉行することになつて居る。



出聖師筆色紙畫

三月卅一日

於高天閣

朝風は冷え渡りつゝ、四方の山烟るが如く霞むが如し
 宇城氏は尙江一行と十一時二十分發綾部に向ふ
 山水の表装八幅出来上り井内氏月明館に持参す
 杉山氏杉原佐久氏同道して來郷飛彈磯談して行く
 壹岐對馬參拜團に特別に月宮殿の禮拜許せり
 神苑に小鳥の囀り清々しく山の尾の上の雲は晴れゆく
 愛宕山峰に白雲たなびきて風冷えわたる南桑の原



(切半) 筆師聖口出

湯に入りて安全剃刀手に握り顔の清潔法を行ふ
 午後二時の龜岡發にて吾一行澄月閑月綾部に歸る
 南桑の農家の軒にちらくく櫻遠近咲き出でにけり
 入木の驛過ぐれば間もなく堀切りのあたりの堤に櫻咲き充てり
 園部驛越ゆれば木崎小學校庭の櫻の色付ける見ゆ
 殿田川流れあせつゝ澄みきりて小魚の影さへ見ゆる心地す
 殿田驛右と左の並山の冬木の梢色めき渡れる
 高地點胡麻驛ほそりの學校の通路に一本櫻かをれる
 下山の驛にし着けば丹脚躰の花山裾に一本笑へる

發電所堰の流れも水浅く春陽に透ける和知の川底
 漸くに山家の驛に来て見れば遠近櫻咲き盛る見ゆ
 掬水莊踏切りなぞに宣信徒白布振りて吾迎へ立つ
 綾部驛用意の自動車馳らせて大本西門神苑に入る
 教主殿小憩の後閑月と彌勒殿内大額を見る
 本宮山檜の木の林潜りつゝ新築穹天閣に入りけり
 大工左官手傳人の晝夜の活動穹天閣に見るかな
 大宮の神材うまく利用して造り上げたる珍の殿かな
 應接室特に目立ちて奇抜なる辛酉の秋の記念を語る

彌勒殿舊の懸額穹天閣の中の廣間の床に据ゑけり
 宮跡に先日植ゑし若き檜の奥深くして莊嚴なるかな
 空晴れし本宮山に聳え立つ穹天閣の莊嚴なるかな
 黄昏れて鶴山下り金龍池龍門神庭巡り見しかな
 大本の周圍三軒數萬圓の代價で買収契約を爲せり
 大本の受付前の道擴め神苑俄に神々しくなりぬ
 杉原氏神輿を求め龜岡へ送るゝ今宵電報來れり

○民國聖使紅卍字會員

東京市の復興に就き市長に贈りたる祝文

大日本帝國皇都復興頌詞

櫻花將に咲ハントシテ暖霽
 皇都ニ滿チ旭旗萬戸ニ飄ツテ瑞雲宮城ニ覆ク此ノ佳辰ニ當リ
 皇都復興ノ祭典ヲ舉行セラル 卑生等偶貴國ヲ訪ヒ此ノ盛儀ヲ瞻ルヲ得驚嘆欽々羨欣喜ノ情
 轉々禁ズル能ハザルモノアリ 干茲謹ンデ祝意ヲ捧ゲ 且希望ヲ述ベント欲ス 回顧スレバ最
 時ノ震災ハ實ニ貴國ノ中樞ヲ劫奪セシモノニシテ其關スル所極メテ重大ナリシニ拘ハラズ復
 興ノ速カナル進展ノ大ナル年ヲ閱スルコト僅ニ七ニシテ今ヤ坦然トシテ其陳述ヲ敘メ燦然ト
 シテ恢宏莊嚴ノ美觀ヲ現出スルニ至リシハ世ヲ舉ゲテ驚嘆五体ヲ地ニ投セシムル所ナリ 此
 ノ如キハ抑何ニ因ルモノゾ 卑生等ハ曰ハンは是レ一ニ上ハ則チ
 神恩
 皇德ノ光被ト下ハ則チ忠臣良民ノ一致ニ外ナラザルコトヲ 卑生等常ニ聞ク
 日本ハ神國也又聞ク

日本ハ君子國ナリト而シテ今ヤ其實ヲ視其証ヲ明カニスルヲ得タリ 是レ專生等ノ欽仰措ク
 能ハザルト同時ニ内ニ顧ミテ羨慕ニ堪ヘザル所以ナリ
 貴國ト敎國ハ同文同色唇齒輔車ノ關係ニ在リ 其ノ相及ボス所實ニ影ノ形ニ從フガ如シ 加之
 專生等神惠ニ依ツテ大道ノ啓示ヲ受ケ
 日支ノ親善合同ハ世界和平ノ根基ナルコトヲ覺悟スルヲ得タリシヨリ
 貴國ノ憂ヲ憂ヒ
 貴國ノ喜ヲ喜アノ念更ニ幾層ノ深度ヲ加ヘタルコトヲ言明シテ憚ラザルモノナリ 是レ今日
 ノ盛典ニ際シテ欣喜措ク能ハザル所以ナリトス蓋ニ
 神示ニ基ヅキ世界紅卍字會ヲ組成シ貴國ノ同志ト結合シテ以テ 世界人類類貧安ノ爲ニ微力
 ヲ捧ゲツ、アルノ今日焉ンゾ默過シ去ルヲ得ンヤ 爰ニ世界紅卍字會中華總會ヲ代表シテ祝
 詞ヲ捧呈シ併セテ輔導戮力ヲ切望スル所以ノモノ實ニ此ニ存ス 只恐ル專生等貴國ノ禮ニ倣
 ハズ或ハ儀容ヲ冒瀆スルアラソコトヲ 幸ニ之ヲ諒セラレヨ。 頓首啓白

昭和五年三月念五日

世界紅卍字會中華總會代表

梁 慈 果 周 根 淨 劉 承 中
 王 承 宴 金 誠 德 孫 听 光
 西 川 零 化 候 又 誠 唐 定 敏
 那 祥 志

東京市長 堀切善次郎殿

○作歌 春 興 (二十八首省略)

鷓鴣啼く本宮山の曙は雨の音さへ長閑なりけり

○宗教大博覽會大本特設館より

三月三十一日 (第二十四日)

比較的寒いのと月末のため人足が頗る鈍いのは無理からぬことである。

本日館内控室と女子宿舎に御神號の假奉齋をさして頂いた。

午後四時過ぎ聖師様の思召で博覽會に出品の神輿を購入のため伊豆杉山富吉氏、杉原佐久氏及天恩郷加藤明子氏、林英春氏來館。中村庶務主任交渉の任に當り神輿を買ひ求めて夜トラツクにて龜岡へ送られた。

明日から八日迄花祭なので入場者の増加が豫想される。

入場者總數四三〇五人

▲觀客批評とりにく

一、『わしは人相學には造詣が深いものぢやが』と自己紹介を前提に語り出した七十近くの老人、

『わしは吉野の山奥で修業したのだが、靈學も克くし、骨相も奥義を極めた。今日出口一家の方の御肖像を拜見して皆さんが大層よい人相をしてゐらつしやるのには驚いた。殊に大本は三代教主夫妻が中心になられる頃には頗る隆盛になることがその人相の上にはつきり

現はれてゐる。わしは斷言しておく』

と語つた。この老人は大本が悪口を言はれてゐた頃眞偽を確かめたいと、龜岡へ一寸來たさうである。そして別に話を聞いた譯でもないが、大本が世人の言つてゐる様な所でなく、逆も素晴らしい所だと云ふことを覺つたとか——。

二、『僕これで七度目です。出口先生は世界一の快男子ですな』と嬉しそうに話す青年がある
一昨日も七度目の來館だといふ僧侶があつたが、まだ／＼他にも再三再四の來館者は多數あるさうである。

三、『出口さんは鏡の様な人ですな。そして出口さんの畫かれた繪はよくみますとどれもこれも皆出口さん御自身の御顔ですな』と告げた人もあつた。

三月三十一日 大阪朝日京都版所載記事

大本教の

春季大祭

あすから執行

大本教では節分祭、春季大祭、秋季大祭を三大祭と云つてゐるがその一つである春季大祭（みろく祭）を四月一日から五日まで、綾部と龜岡の兩本部で執行し、また二日午前九時から綾部町の本宮山頂で穹天閣の落成式をあげる、穹天閣は大正十年有名な大本事件で京都府警察部から取毀たれた建物の用材を用ゐて昨年五月來再建に着手したもので今後二階を陳列所にして大本發祥以來の記念寶物を陳列するはずである。（後略）

三月卅一日 丹波毎日新聞所載記事

王仁氏の作品を

讀者に抽籤で進呈

出口聖師作品展入場券を

本日の本紙に添付

既報に大本教主出口王仁三郎氏の作品展覧會は、愈新装したる綾部三ツ丸呉服店二階陳列場にて明一日より五日まで開催される。展覧品は書、畫、樂燒等、約百點でいづれも優秀なる作品揃ひである。尙後授である本社より讀者へ配布した招待券をもつて入場された人へは抽籤券を進呈し五日正午同會場にて抽籤の上、當選者へは王仁氏筆の一幅數百圓の價値ありと評されてゐる書、畫、色紙、短冊等を贈呈する事になつてゐる。王仁氏は最近一般の揮毫を斷つて居られるのでその作品は容易に手に入れにくいもののみである。尙、三日午後王仁氏は會場にて席上揮毫を快諾されてゐるが會場にて直接同氏への揮毫依頼は絕對にお断りすると。

三月卅一日 大阪今日新聞所載記事

春季大祭と穹天閣の落成式

綾部と龜岡で四月一日より

大本教では四月一日より五日まで五日間綾部及龜岡の兩本部に於てみろく大祭を執行する、みろく祭は大本教三大祭即ち節分祭、春季大祭、秋季大祭の一で例年内地各地は勿論遠く北海道、台湾、朝鮮、支那、滿洲方面よりの参拜者萬餘を數へ殷盛を極めるが今年に於て開催中の宗教大博覽會と左記穹天閣落成式の關係上参拜者も例年に數倍する見込である。その穹天閣落成式は四月二日午前九時より京都府綾部町本宮山頂にて去る大正十年の所謂「大本事件」の際取毀された拜殿其他の建物の用材を以て昨昭和四年五月新に工を起したもので大本獨得の建築様式による二階建の莊麗な建物で二階は大本の發祥以來の記念寶物の陳列に宛てられる事となり、恰も大祭中であり参拜者も多く稀有の盛大さを見せるであらうと豫想されてゐる。

三月廿一日 小倉新報所載記事

侮り難い傳播的傾向を持ち

日と共に興隆の一路を辿る

小倉市の大本教

宇都宮氏を中心に集る

堀之内高潔氏も半生を捧ぐ

△一時、天下の視聽を集めた所謂皇道大本教は、世人が周知の通り大正十年に官憲の忌諱に觸れて解體した。京都府下綾部町に於けるその總本殿には其筋の彈壓が降つたのみならず、教主の出口王仁三郎氏は不敬罪を以て司直の審理を受けた。

△斯くして形體的な皇道大本教は霧消雲散したかに見えるけれ共、其の教義とその本旨は、爾來彌々向上し、精洗されて、益々弘通し普遍しつゝある、新宗教としての根深い勢力が四方八面に擴大しつゝある事は、局外の想像以上である。近き將來に於て、必ず新陣容を整へた大本教が、再び天下の視聽を集める事だらう。

△現在に於ては、大本瑞祥會、天聲社、愛善會……等の名に依つて其の教義が宣布されて居る、講演……著書……新聞……などに依つて……現在の同教本部は同じく京都府下龜岡に在るの觀を呈し、綾部は奥の院になつて居るが龜岡へも、綾部へも参籠し、研究し信仰の門に入る者は、毎日相當の多數に

達して居る、殊に教主の出口氏の蒙古入が機縁となり、道教の流れに棹させ
る紅卍字會と握手してより以降は老祖と大本神が一体であるとの新論理に立
ち愈々其の教勢は水の低地に赴くが如く擴大し普遍し浸潤しつつあるかに見
える。

△實に九州に於ける大本教の輪廓を見ると、熊本に別院があり、支部と分所
を合して二十二ヶ所を算する。其内、福岡縣は福岡に二ヶ所と、門司と小倉
に各一箇所ある、他は暫くおいて、小倉の方だけを見るに、大本瑞祥會の鎮
西分所が大阪町の都庵宇都宮綱治氏邸にある、紅卍字、道院などの看板も併
せ掲げられて居る。元來、此の分所長なる宇都宮氏は多年に亘りて皇道、神
道などの外護者であり、其の地方の皇道家、神道家などで氏の援助を蒙つた
者は擧げて數ふる事が出来ない、本紙は屢々、皇道家、神道家としての宇都
宮氏を紹介した事がある。宇都宮氏と大本教との關係は大本教發祥以來の事
であり、本部の名流が宇都宮氏を訪うた事も多く、宇都宮氏も亦本部に赴い
て教主出口氏以下と談論した事少からず、最も熱心にして至誠な外護者であ
り信徒である。同氏の様な眞剣な態度を持ち、教理に明るい篤信者を持つ事
は九州の大本教に取つて非常な強味である。

△鎮西分所は宇都宮氏の外に、本部で教へを受けた西魚町の掛豊彦氏を始め

熱心者が六七人居り、各種の機會を利用して宣布して居るが、求道者は日と
共に加はりつゝある。愛善會から出て居る機關紙『人類愛善新聞』が小倉市
方面だけで六百三十人の讀者を有する事に徴しても、如何に同教の精神が傳
る可からざる勢力を以て傳播されつゝあるかを想像し得る。宇都宮氏邸に此
の分所の看板が掲げられたのは先月の十五日であるが、此の分所即ち宇都宮
氏邸に祀られてある大本皇大神の神殿など、誠に堂々莊麗を極め、人をし
て自ら懺を正さしめ、敬虔の念を起さしめる。

△小倉市に於ける大本教は宇都宮氏の外に以前は久野福松氏、森山寫眞館主
元永敬助氏、八木龜屋旅館主などが支持者であつた様に記憶する、今も尙續
いて居るか否かは確聞しないが、こゝに面白いのは色々の意味に於て一時小
倉市では著名だつた堀ノ内高潔氏が宇都宮氏の話を聞いた後大本教に走り、
『終生を是に捧げる』と誓ふ迄にハマリ込んで居るとの噂である。

△尙ほ宇都宮氏邸なる鎮西分所の例祭は毎月二十二日であるが、此の日には
毎回相當多數が參集する、何れも其の態度の眞面目さが人を惹きつけねば止
まない勢力を持つて居る。小倉地方の大本教……それは宇都宮氏を中心にし
て級數的な向上の途上にある。

四月一日(舊三月三日) 於穹天閣

朝の五時眼さまして風呂に浴り再び臥床に入りて休らふ
早朝より各地の宣信教主殿に詰め寄せ來り忙がしきかな
鶴山の穹天閣に登り見れば工事の大分出來なしをり
各地方宣使に命じ黄金閣の吾著書原稿鶴山に運ぶ
彌勒殿宣信所狭きまでに參集なして大祭に列す
王仁二代三代重職上殿し玉串捧げ神言を宣る
穹天閣階上寶物室内に靈界聖談原本を納めし

櫻井氏山水油繪の額を穹天閣に奉納なしたり
高木氏は松の屏風一對を穹天閣に奉納なしたり
高木氏奉納したる大龍畫今日中床に立て飾りけり
明日の日は落成式の當日と木工今夜も寐す働く
彌勒殿大祭終り二代始め重役支那人演壇に立つ
等身の教祖の木像午後十時穹天閣の神殿に鎮座す
祭典を終りて役員祭員等十一時山下り歸れり
何んもなく穹天閣の住心地落着き晴る、思ひなりけり
餘りにも心地よきま、今夜より穹天閣を宿せしかな

大床に桃の花をば生けにけり三月三日の曲水宴の日

○作歌 春の部 (七首省畧)

○昭和五年みろく大祭概況

自四月一日(舊三月三日)
至四月五日(舊三月七日)

▲繪部

大祭第一日 (四月一日)

なんとなくハッキリとしなかつた昨日來の天気も今日はからりと晴渡り、大祭にふきはしい好日和である。柳は生々とした若芽をふき出し、處々に桃花のほころびるを見る神苑は長閑な氣分を漂はして居る。西石の宮横の道路も全く改造を了し、従前の約三倍の廣さとなり易々と受付に自動車の横付けが出来た。十曜の神旗は町家各軒毎に掲揚され、かすかな春風は恰も大祭を祝福するかの如くなびいて居る。流石に信徒の面には包みきれぬ喜

悦の色が満ち／＼て居る。

朝の拜式は五時半より日出磨様の御先達にてみろく殿、教祖殿、祖靈社と平常通りの巡拜が行はれた。

至聖殿 祭典

午後一時、第二報鼓が神苑の静かな空氣を打震はす頃には、さしもに廣きみろく殿も参拜者を以て埋められ、聖殿奥深くより八雲琴の妙なる音律が流れ出すと、齋主日出磨様を先頭に祭員廿餘名静々と参殿着座、祭典は型の如くいと莊嚴に始められた。海河山野の種々の神饌物は文字通りに横山の如く大前に供へられ、朗々として宣る齋主の祝詞も終り、祭員に迎へられて聖師様、二代様、三代様、壽賀磨様、宇知磨様及高木内事部主事参殿。玉串捧呈は聖師様、二代様、齋主日出磨様、折柄滞絨中の梁慈果氏支那道院を代表して捧呈さる。次いで一般代表として御田村天恩郷主事の順序に終り、聖師様御先達の神言に一同和す。かくて一時間半に餘る祭典も目出度く終了し、ひき續き宇知磨様の御先達にて神歌奏上。續いて井

上總裁の挨拶、終つて支那道院赴日團を代表して團長梁巖果氏の熱誠なる挨拶（通譯西川氏）あり、次いで昇任宣傳使三百十七名、新任宣傳使五十五名の辭令の交附が神前にて行はれ、一先づ散會。

尙支那道院赴日團一行は午後四時五十二分發の京都市にて直に歸國の途に着いた。本日は夕拜式無く、午後六時半より節分祭即席冠句の開卷あり、秀逸句續出して一同天國氣分にひたる。終つて明日正午迄の締切にて冠句の出題があつた。

八時より二代様のお話、更始會幹事の集合等あり。十時頃より教祖様の御木像を穹天閣にお遷し、て御遷座祭があつた。祭員は湯川、上窪、竹原、小畑、湯淺、飯田の諸氏。東尾、櫻井、高木の各總務お供をして十一時頃御遷座祭は目出度く終了。聖師様、二代様には其まゝ穹天閣にてお泊りになり、斯くて意義ある大祭第一日も無事に終つた。

因に本日より向ふ四日間、被部町三ツ丸階上にて聖師様御作品展覽會が開催される。

○宗教大博覽會大本特設館より

四月一日（第廿五日）

開會以來三週間餘にして既に四月となつた、綾の聖地に於ては今日よりみろく大祭が行はれる。

京洛の地では今日を第一日として花まつりが催された。全市中花に埋まれど俗塵に汚され足音の錯綜耳につまづく。

岡崎の花は六分開き、宗博は暖かさに誘はれて八日まで花まつり週間である。

花見気分といふのだらう。人足がチツトも止まらない。ドン／＼流れる様に出て行く。樂焼も案外閑散だ。

花まつり週間は正門にて小兒に風船をつけた紙旗を渡してゐる。その紙旗の文句が面白い『サア／＼行きましよ、宗教博へ、地獄の鬼と遊ばせう』

大本館の控室にはその旗の『地獄の鬼』『丹波の鬼』と貼りかへられてきしてある。

長閑さが満ちてゐる。午後は益々出足が多くなり、館内雑沓して午後六時閉館した。入場者總數一萬三千三百四十一人。

◆四月一日 雑誌「宇宙」所載記事

——上野に異彩を放った——

出口 教主 作品展

X Y Z

二月廿一日より同廿七日まで一週間、上野の日本美術協會に於て開かれた大本教主出口王仁三郎氏の作品展覧會を観る。

作品は多く半折全紙位なもので達磨には中々見るべき物もある。戯畫は幾分飄逸さを通り越して居るやうだが兎も角、筆は器用なものである。

福女も亦氏の好んで描くものらしく初代浮世繪あたりの筆致をしるばせる物があるかと思ふと天明の地國戯畫なんかも見てゐるらしく随分いろんな所でいろんな天分を發揮してゐる。

總じて宗教家の繪は氣分に制限され易いもので一方に逼してともすれば高踏的になり易いものであるが氏のとつた畫題は現實のありの儘の實相から隨時に着想してゐる所、氏の人格と宗教家としての生活態度とがうかゞはれてゆかしい。そこに又氏の精力家的な油っこい力もよくしのばれてゐて時節柄たのもしくもある。

國常立尊、天照大神、天女の大幅や觀音の像など氏の度胸の太さがよく分る。氏は筆の先で描くのでなく腹で描いてゐる。

全然師にも就かずに只々天分に任せて——氏の狂歌の文句を借りると「只ひとすぢのつなのまに／＼」（神の意志のまゝに、……の意ならむか）——畫いたもので所筆は自由に馳驅してゐる。

殊に氏の繪は所謂イデオロギイを持つた繪で民衆教化の強い意志のもとに描かれたものが大部分である所から或種の熱情が見られて面白い。特にその戯畫は凡て狂歌の自讃入りでユーモラスな物が多く観る人に何となくなつかしさと親しみとを覚えさせる。

左にさうした戯畫と讃とを少しく御紹介して見よう。

□ 「維摩居士」の繪卷は居士が岩上に坐して修業してゐるもので「此の上に修業しようとは維摩居士而壁九年しりくさつて」と自讃がある。

□ 目蓮尊者の繪卷には「彌陀の世は早目蓮とする末法、七法出世はあてにならない」

鉄鉢を抱へてくしやみをこらへたやうな顔した「蘇頌陀尊者」には「鉄鉢が空虚になれば飲食を蘇頌陀尊者空虚に引きよす」

法衣を繕つてゐる迦哩尊者には「袈裟破れつくらふ迦哩尊者自分のものは氣がおけぬなり」「迦葉尊者」「佛の法迦葉に纏れた上からは釋迦さまにな

つても謎はとけない」

□ 又「猿廻し」で「財産を背負つて故郷を猿廻し尻に火がつき居所なければ」「なげきつゝいかい目をむく猿芝居、只一寸ぢのつなのまに／＼」と運命に支配されるいぢらしい人の姿を描き「頭と頸」で政憲の泥仕合を諷し「朱ぬりの歪」で赤化思想を戒め、或は鞍馬熱を諷刺して見たりしてゐる。

□ 「養仙人」では「養仙か天竺徳兵衛か鉄拐か分らぬ畫だががまんして見よ」と妙な言譯をして「二つ目にかへる／＼といふ嫁にがまの術でもふつかけてやれ」と近頃の離婚流行をフンガイし、「布袋の河渡り」で「やつかいもの天窓にのせて浮世川やす／＼渡る布袋腹かな」と子をついで世を渡る親を描いてゐる。

□ 「隻履連磨」では「半世をば地下に埋めて半生をば輝き渡る 隻履の連磨」「櫻井の別れ」は「櫻井の別れはしばし辛けれど菊水の香は千代に流るゝ」と東洋精神を讚美したるものである。

□ 「相合傘」と題しては「兄弟かはた相愛の道行きか傘に面をかくす雪道」などゝとても碎けた苦勞人振りを發揮してゐる。

尙又かうした繪畫の他に書にも中々見るべきものがあり樂焼に古瀬戸や三彩系統の物で一吋面白い味をみせて氏は八面六臂の才を發揮してゐる。

◇四月一日 中國民報夕刊所載記事

萬富驛附近熊山戒壇へ

大本教主來岡

熊山戒壇復興のため

王仁三郎氏出張

既報、岡山縣和氣郡熊山戒壇の復興並に大本別院設置の爲去る廿七日高原熊山、片山太田兩村長地元代表者○○○○氏は木下岡山支部長同道にて丹波龜岡に大本教出口王仁三郎氏を訪ひ戒壇につき從來の舊蹟保存會に於て戒壇復興に盡力した事、靈山熊山の由來を説明せしに戒壇復興は大本教に於ては確定的なる事を言明し分院新設も熊山戒壇を復興し殿堂を立てる以上は萬富

驛附近に分院の設置は當然必要を認むると暗に設置の意をほのめかし近日出口氏自ら實地踏査に來村の筈である。

◇四月一日 中外日報所載記事

王仁と語る

(現在の大本教見物記) (一)

○宗教博覽會で大本教の人氣がすばらしくもあり又箱内の隅々まで教主王仁三郎氏の生命が漲つてゐる事に非常になつかしみを覚え、ふと龜岡の出口王仁三郎氏をおたづねして見たくなつた一行、涙骨、恒一、延子、靜(岡田)それに私(涙草)の五人連は山陰線に乗り込んだ。

○何しろ乗車廿分前の急な思ひつきとて随分滑稽なほどあわてた。しかもそのあわてた影響で大急ぎで列車へまで註文した俳葉を忘れ傘を龜岡で乗り捨てた列車にわすれて了つた。これでは成程わすれ傘だと洒落ても居れず龜岡驛に頼み込んで次の驛から引き戻して貰ふ事にした、勿論列車ではない、菓子だけである、お蔭で驛に持つてゐる乗客に大分笑はれた、その中の一人

の坊さんも笑つてゐた。しかしすぐ眼の上に聳え立つ龍宮殿のやうな建物を
見上げて大本教氣分に襲はれ始めた、これを鎮魂氣分といふのだらう。

○案内知つた恒一氏の先頭で世界宗教聯盟本部や人類愛善會本部などの看
板がいかめしくかけられた門を這入つて受付に行くと先に京都からお願ひし
てあつた爲か「ヤアお待ちしてゐました」と氣持のいい全體のこなしでお
迎へして下さつたのは字知磨さん(女婚)であつた。

○どうぞこちらへと立派な應接室へ通される、私や延子、静子嬢ら初対面
の挨拶をするに「ハアいつも紙上でお目にかゝつてゐます。どうぞよろしく」と
女のやうなやさしさもあるが非常にすゞしいすつきりとした氣持である。
それからいろ／＼説明をきゝ乍ら龜岡城址の遺物や數限りなき王仁教主の揮
毫物を見せて貰ふ。

○全然習はないで書いた野人の畫にも字にも自らの力がこもつてゐて筆者
の人格と人から畏敬されるものゝ自然に備はる氣品を出してゐるのは面白く
拜見する事が出来た。何でも博覽會へ出すに就ては警察方面から何を出品す
るについても随分と警戒を受けた模様でいろ／＼と注意をされた様である。
その中でも神苑といふ字を使つたのがいけないからと中止させられた滑稽も
ある。

○東京の展覽會中にも二人の男女が相合傘で行く所の畫が問題になつた様
だがその上の讀に兄妹と書いたので事なく済んだといふ滑稽もある。(つゞく)

編輯日誌

……前略……

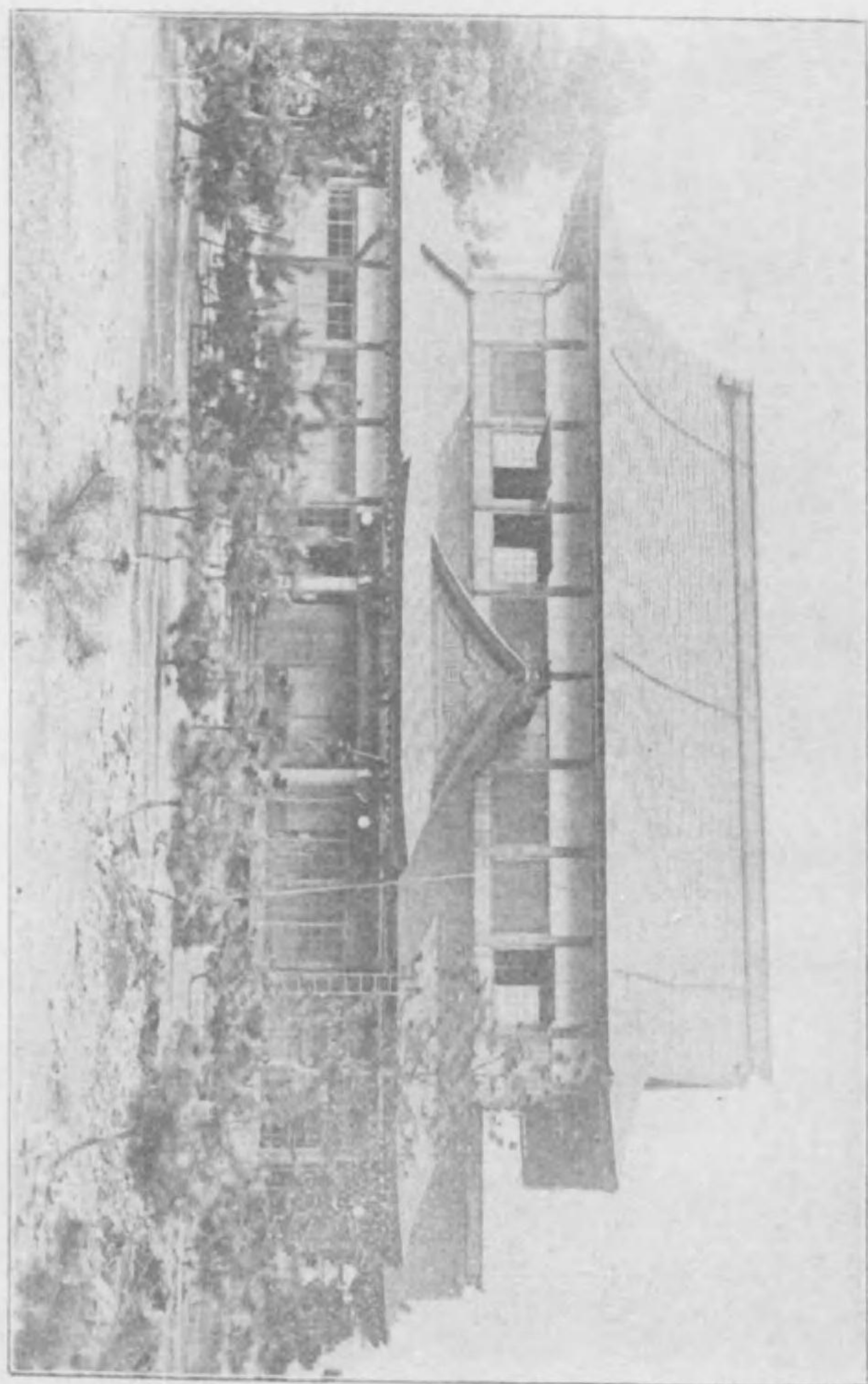
△土曜の午後、俄かの思ひ付で恰も居残つた社員五人は龜岡に大本教を訪れ
る△若い美しいそして言ひ知れぬ魅力に富んだ字知磨氏の案内を受けた△今
日始めて竣工をつげた春陽亭や秋月亭に入つて今溢れ出んとする春光に眼を
放ち△王仁三郎氏と共に夕食の饗を受け氏の近作に係る樂燒薄茶々碗一ケづ
ゝを土産されて歸つた。

大本近況

○大本教では一日より五日迄の大祭の期間中に其中心の各部の集會が催され
て局面一變的な事が催される即ち二日には全國を十五區に分つた分會の代表
者(百人位)が協り三日は瑞祥會の各府縣分所支部長會議が行はれ之には一
千名程の集りが出来る、尙同三日は地方分會大會かの代表者が二三千人は集

るといふ、尙四日は宣傳使大會があり千五百人位は會合する◎世界的レコードとなつて居る七十二巻を出してゐる靈界物語は久しく出版されなかつたが今度龜岡本都にその口述の爲、春陽亭が建築されたので近くその續巻が出来ると◎支那の道院（紅卍字教）と連絡をとつて居る、それは其交渉益進み近く具体的なものが出来ると。

中外に名を知られたる大本教
 中外の新聞王仁を紹介し
 宗教博極樂館の窮屈さ
 道院も互に加はり宗博見



關大塚の上々山鶴たれさ成海

四月二日

於穹天閣

穹天閣朝起き見れば汽車の音手に取る如く響く圓山朝の空夜來の雨はまだ晴れず吹く風寒し本宮の山穹天閣落成式の報告祭日出鷹齋主となりて奉仕す穹天閣庭も狭きまで宣信徒伊寄り集ひて式に列せり祭式を無事に終りて宣傳使黄金閣より寶物運べり穹天閣階上廣く大本の寶物並べて調査にか、れり午後一時教祖祭典式場に列せんとして山を降りぬ



出日聖師聖代教主並並大建團團前（穹天閣）

教祖殿祭典終り小雨ふる中自動車にて奥都城に上る
 奥津城の御前に二代三代や宣信數多と太祝詞宣る
 大神の慈悲の涙か奥津城の庭じめくく小雨ふりしく
 自動車を再び馳せんと山籠をおりてそろく神苑に歸る
 二聖殿祭典のため日出處は宣信引きつれ馬場に向へり
 教主殿歸りて少時休憩し再び本宮山に登れり
 夕風は頻りに立ちて薄寒く小雨ふりしく何鹿の空

○作歌 春の部 (三十五首省略)

○

牛飼ひし童の頃より風流の道を一入好みし吾かも

○來 信

山口 教主 様

上 柿 大 樹

御無沙汰をいたします。益々御神現御多忙を何よりの御事と御よろこび申上げます。宗教博に行つて久し振りで我が國へ歸つた心地が致しました。

そして御神筆とも思ひます幾多の御幅を拜しまして 何共云ひ知れぬ心地になつたよろこびをもつて居ります。

近いのですから一度龜岡へまで寄せて頂きたいと存じては居りますがその意を得ず貧乏障なしとは困つたものです。御寫眞の内にも一等親しいと思ふのは、あの淨瑠璃の御神姿で、玉はんが光榮の三昧を弾き、あの瞳には心からのなつかしみが、しみんと湧いてきます。

入場第一に大本館のある事は第一印象として、それは本當に神の力とでも云へようか、よい場所ですアット感じました。

而して今更のやうに御宣傳の行き届いてゐる様が手に取るやうにしてあるのには驚かさ
れました。歩き川柳に親しみましたので御笑草までに。

宗教博をみて

宗教博 大本館の畫幅展
子を連れて宗教博はみるところ
大本館 教主作品展のやう
大本館 教祖を拜し奉り
御札所が一つところに宗教博
宗教博 鐘ついてみる氣にもなり
極樂の家は西洋じみたところ
御札所にロウソク二錢と札があり
地獄室 鬼は人間入れてくれ

大本に始まつてゐる宗教博
大本を拜してからの宗教博
赤鬼が宗教博でこはがられ
宗教博 大本館で樂焼し
宗教博 ひまがいます大本館
玉はんが三味弾いてゐる大本館
大本館 信者の聲の親切さ
あの箒筆であつたは大笑ひ

○

年もまだ十四の春より校庭に教鞭ふるひし早熟のわれ
女紅場の窓を覗いて校長にあぶらとられし十四の吾春

○作歌春の部 つゞき (三十五首省略)

入り込みに書いた手帳の中味かな
新聞を張り込にした手帳かな
花盛り宗教博に金の雨
大本館宗教博の牛耳取り
宗教博もてるは鬼と玉仁となり

○昭和五年みろく大祭概況

▲続部

大祭第二日 (四月二日)

昨日の好晴にひきかへ、本日は朝来春雨霏々と降り冷氣身に沁む。

朝の御禮は五時半より日出磨様の御先達にて約一時間半を要して平常通り行はれた。

一 寫天閣竣成式

午前九時第二報鼓が鳴り渡ると参拜者は陸續として鶴山山上に参集。中には綾部町を代表する助役遠坂憲治氏、實業協會を代表した同會長出口常次郎氏の姿も見うけられた。間もなく八雲琴の奏樂につれて齋主日出磨様、齋主補湯川祭祀課長、祭員上窪、竹原、小畑、成瀬湯淺、齋藤、飯田、安部(寓)、前川の諸氏着席。

祭典はいとも嚴肅裡に始まり献饌、齋主の祝詞終れば聖師様、二代様臨席になり、玉串を捧呈さる。次に齋主日出磨様、大工棟梁近江長太郎氏、作業課長吉田春耕氏、遠坂憲治氏、出口常次郎氏の順序にて捧呈され、最後に井上總裁は参拜者を代表して奉仕の至誠を捧げ奉る。それより聖師様の御先達にて一同神言奏上、こゝに意義深き竣成式も無事終了。

寒い風は相變らず吹きまくる……雲の脚がだん／＼怪しくなつて来た。分所支部長及び其代理者は教祖殿より寫天閣納品の運搬に奉仕すべく直ちに下山したが、一般信徒は雨となつ

た爲許されて殿内を拜観し隨時下山の途についた。

○ 晝の拜式は午前十一時より湯川祭祀課長齋主の下に行はれ、山川石太郎氏代表して玉串を捧呈す。

教祖殿祭典

○ 明け放された教祖殿を遠慮なく吹き通す寒い風が並べられた八雲琴をうならしてゐる。定刻午後一時には参拜者、殿を埋めつくしお庭にも人山を築く。

報鼓を合圖に八雲琴奏樂裡に祭典開始、齋主日出磨様、齋主補井上、東尾兩氏、祭員上座氏以下八名。献饌、齋主の祝詞奏上ありて聖師様、二代様、齋賀磨様、宇知磨様御昇殿、直ちに玉串行事あり。終つて聖師様の御先達にて一同神言奏上。かくて祭典も滞りなく済み、参拜者一同は天王平教祖奥都城に参拜すべく雨模様の中を出發。

因に教祖祭玉串捧呈者は聖師様、二代様、齋主日出磨様、親戚總代出口竹藏氏、一般代表

岩田久太郎氏。

天王平奥都城参拜

○ 三十分を経て奥都城前齋庭に集ふもの約五百、聖師様、二代様、日出磨様、宇知磨様は自動車にて御越し。少憩の後開祖奥都城前に着座、聖師様の御先達にて一同神言を奏上、それより揃つて出口家奥都城にお禮する筈であつたが、雨の爲隨意参拜となり、参拜者は聖師様二代様、日出磨様の御手づからのお下りを頂き、引き續く二聖殿の祭典に参詣すべく雨の道を歸路についた。

二聖殿祭典

○ 日出磨様臨席の下に齋主田中善守、祭員稻垣襄藏兩氏にて午後四時祭典舉行。参拜者は雨を目して参拜。齋主の祝詞奏上、玉串行事済みて日出磨様の御先達にて一同神言奏上、五時前祭典終了。参拜者は悉くお下りの菓子や果物を頂き隨時散會した。

○

夕の御禮は六時三十分より湯川祭祀課長先達の下に行はれたが、引續きみろく殿にて更始
會役職員の會合が催され、尙第三回分會總會が開かれ、種々熟議を凝らして散會したのは十
二時であつた。

一方夕拜後祖靈社にては栗原白嶺氏の『若返る神祕』について講演會があり、九時半閉會
した。

○宗教大博覽會大本特設館より

四月二日 (第廿六日) 何といふ寒い朝だらう。殆ど二月の陽氣さである。叡山と愛宕山は雪化粧をして傑へて
る。

『スキーと花見が一緒に出来ませ』

田中宗博係が火鉢をかゝへてみんなを見廻す。笑ひが崩れる。入場者は極めて少い。

『この寒さぢやねえ』
と誰か言ふ。

これから聖地へ参拜するといふ宣信徒の姿が大分見受けられる。アは、聖地出
來館者の少い割合に樂焼が繁昌してゐる。寒さに慄へて時が過ぎ去つて行く。
入場者總數四五八七人

○四月二日 中外日報所載記事

王仁と語る

(現在の大本教見物記) (二)

(承前) ○さて一行は知恩院の營張りを壓倒した程よく鳴る廊下に軽い興
味を持ち乍ら表に出る、そして月宮殿に参拜した。廣島から来たといふ石の
珍らしい大きな仁王さんが兩方に立つて居る、木食張の仁王さんだ、又其少

し奥に石像の観音が石の上に立つてゐる。何だか異國の佛教殿を見てゐる様だが中央の宮殿は全部石で造られた全く龍宮殿の様な宮居で一種の清爽な神嚴さをもつた静かな存在である。手を合す氣分といふよりはそこに吸ひこまれる様な氣分である。〇色々これらに就て書き度い事もあるが餘り長くなるので只美しい藝術的な存在だといふ説明で止めておく、即ち宇宙一切は造化の藝術だといふ教主の理想にびつたりしたものを持つてゐるといふ譯である只佛教的な象徴形態が多く取入れてゐるのは單に裝飾ぢやないでせうなときくと、何でもこゝに來て成佛するのです、こゝに來て始めて凡てが調和するといふ意味で何でも取入れてゐるのですといふ、一切の抱擁だ〇折からハラ／＼と春雨がこぼれて月宮殿に時ならぬ調ひを見る。「どうぞこちらへ」とそこを退くと「これをおさし下さい」と駈けつけて來た人がそれ／＼傘を貸して下さる、道で逢ふ人が皆々静に黙禮をして行く、今將に竣工しようとする春陽亭と秋月亭を見せて貰ふ、名が料理屋のやうである丈に先づ展望の間であり茶菓饗應の間といふのであるといふ。成程見晴らしは絶景である。愛宕比良の連山を望み丹波の盆地平野を坦々と見晴す、藁屋は點々として其の間に櫻の早咲きを見る「これはこゝで間借がし度いナ」と涙骨先生も恒一氏も涎を流す「間借」にプロとしての本領を發揮するとすかさず宇知磨氏「何程

でお貸ししていただけますか、六圓位ですか」と野次る〇明智光秀が築いた龜山城當時からあるといふ大銀杏が高く聳えて兩亭に影をつくつてゐるがその銀杏を兩亭の建築の爲に少し切らねばならなくなつた時、旅行先の王仁教主から非常に惱んで「切るならばよく言ひ聞かして切つて呉れ」と電報で言つて來たので充分仕方のない事と言ひ聞かせて邪魔になる枝を切つたといふ事である。(つゞく)

四月三日

於穹天閣

朝晴れの本宮山の清しきは將に天國淨土の心地す

献勞士峻坂上るも苦となさず清水運びて風呂を沸かせり
 風寒く穹天閣をよぎりつゝ木の葉搖る音高き今日かな
 彌勒殿直會式に列席し數千の信徒と共にいたゞく
 久しぶり綾部の三つ丸呉服店に出張なして揮毫なしけり
 東京より大嶋大崎兩宣使來りて種々談し合ひけり
 入重野子や尙江子今日より本宮山穹天閣に移りて住みけり
 張宗昌龜岡神苑に近日中伺ひ度しと電信來れり
 久原氏は在京中と牧野氏より今日大本へ電報ありたり
 ○丹波毎日新聞及三つ丸呉服店に對して

詠み送りたる短冊の歌二首

日々の世の出来事をまつぶさに社會に示す丹毎新聞
 千客萬來堂に三つ丸呉服店 花景を出す花の春かな

○

三つ丸の自動車にのり午後の五時教主殿へと立ち歸りけり
 教主殿しばし休らひ徒歩なして丸山穹天閣に上れり
 東海道五十三次江戸の繪を張りたる屏風を高殿に納む
 午後八時汽車にのらんと本宮山近侍引きつれ神苑に下る
 風月の母の病の重しと聞き自動車待たせ病床見舞へり

西本町福本亭に小よりして玉々何か忘れてぞ行く
夜八時二十八分發にのり見送る信徒と綾部に別る、
踏切りや掬水莊に白布ふり吾行く夜汽車見送りてあり
漸くに山家の驛に来て見れば宣使數人吾室を訪ふ
闇の幕四方を包みてゴト／＼と汽車のわたちの音のみぞする
山の家の電燈ちら／＼見え初めて間もなく和知の驛につきたり
すれ違ふ汽車の二等室一人の客さへなきは緊縮の祟りか
右左自惚れ鏡に變りつゝ、トンネル知らぬ夜行汽車かな
登り路わたちの音もゴト／＼と辛氣くさきかな今宵の汽車中

後髪本宮山に引かれつゝ、いや／＼歸る龜岡の空
本宮山別に戀しくなければ今日より山の神が鐘座す
さうしても汽車の奴めが下山の驛までうせて段々遠ざかる
今頃はさうして居るか山の神僕は下山闇に越え行く
こゝまでも來ては是非無し歸らめむ汽車は綾部へ逆行せぬから
澄開月でかい目をむく夜行汽車に目を細うして漣くるおれ
百度以上のほせた俺をのせた汽車最高地點の胡麻驛低し
高い／＼歌斗りよみて知らぬまに六百呎の胡麻に月の夜
矢の如く汽車は夜路を下り坂殿田の驛に早くもつきけり

走り行く汽車もどかしと思ふかな花明山の空戀しきまゝに
 澄閑月美人と汽車の夜の旅龜岡下車の恨めしきかな
 世木殿田園部入木驛のりこえて早くも龜岡停車場に着く
 天恩郷歸りて見れば宣信徒觀音通埋めて待ちをり
 高天閣安置の神輿夜に入りて月宮殿に納めてしかな
 神体を祭り込みたり明日の朝の神幸式に備へんとして

○作歌 野遊 (十一首省略)

○昭和五年みろく大祭概況

▲繪部

大祭第三日 (四月三日)

午前五時半朝拜式あり、多数参拜。

○

昨夜來の雨は上つたけれど、風強く、春とは思へず、
 午前八時半よりみろく殿に於て神武天皇祭遙拜祭舉行。三代様御出まし、湯川齋主以下祭
 員九名にて嚴かに舉行。三代様玉串捧呈後、一般代表東尾吉雄氏玉串捧呈。三代様御先達の
 もとに一同祝詞を奏上す。時正に九時。引續き分所支部長賛襄聯合會合開催。

十時三十分より引續き各地方分會大會開催。
 晝の拜式後直會開催。聖師様、二代様、日出磨様、三代様 壽賀磨様、字知磨様御出席。
 一同和氣蕩々の裡に折詰のおこわに舌鼓を打ちつゝ御神酒を頂く。聖師様御退殿後三々五々
 として退殿。

斯くて繪部に於ける意義深き三日間の行事も目出度く終りを告げた。

○宗教大博覽會大本設館より

四月三日 (第二十七日)

動物園の花をたづねての人足に、宗博も朝から中々賑やかだ。

昨日の寒さもどうやら暖かさに復つて花も一息ついてゐる。

小雨が申譯に降つて止むと、あとは眩しい陽の輝きがさしてくる。關西畫壇の巨星山元春

舉氏が來館した。樂焼を畫いてゐるのを見ると抹茶々碗に粟を二つ畫いて

『濫皮が剥けて丹波の男振り』

と讚を記す。早速氏の批評を叩くと、

『出口さんは兎に角大膽に畫いてますね、中々うまい所があります。あゝして刷毛で山の樹

木を畫くところなど獨創的ですな。畫家もよくさうやらうとするものですが、どうも出來か

ねるところなんです』

後は話さない。午後から益々出足が加はる。地方の宣信徒達の姿も大部見受ける。

此間の神輿の講入が大分あつちこつちで問題になつてゐるらしく、いろいろな情報が事務所で笑ひの花を咲かせてゐる。

入場者總數一六二〇〇人

○四月三日 大阪毎日新聞所載記事

大本みろく祭

綾部と亀岡で

大本教ではみろく大祭を一日より三日まで綾部にて舉行、信者多數入り込み町内は賑はひ町内各戸は十曜の大本旗を掲げて居る。次に四日より五日にかけて亀岡で舉行、綾部三ツ丸呉服店二階では一日より五日まで同教出口王仁三郎氏の個人作品展覧會を開き一般に觀覽せしめてゐる。

◇四月三日 丹波毎日新聞所載記事

すばらしい人気

入場者一千を突破す

綾部の王仁作品展

本社後援綾部三ツ丸に於ける王仁三郎氏作品展は、すばらしい人気で第一日の四月一日の入場者は一千名を突破し地方此種展覽會のレコードを破つたさらに明三日は王仁氏の席上揮毫があるので一層の入場者を見るであらう。尙作品進呈の本社抽籤券は毎日午後八時まで第二室で引替へてゐる。

◇四月三日 人類愛善新聞所載記事

既成宗教は

一大危機に直面

期待をかけ得る大本教

宗教大博覽會總務 永末明氏談
日本歴史會理事

今から五十餘年前、ウインで開かれた博覽會に日本が参加したのが、我國博覽會の濫觴で爾來産業方面に立脚して開かれた博覽會は其數を知らない程であります。宗教に立脚した博覽會は本會を以て嚆矢とします。本會としては、宗教觀念の薄弱な日本國民の教化及び宗教的雰圍氣の醸成を外面的な目的として居るのは勿論であります。之を内面的に見れば既得の地方的勢力の保有にのみ汲々として宗祖苦難の眞諦を忘れ徒らに排他的に傾かんとしてゝある既成宗教を、此の企てによつて氣分的に斷然提携せしめ、引いてはうはすべる現代の危險思想の牙城破壊に資したいといふ本願であつたのであります。果して、開設未だ日が浅いと云へ、其結果を見ますにいかにか大衆が思想的に目醒め何物かを求めつゝあるか。充分に窺はれ、今後各宗教家が其襟度を開き陶酔から醒めて現世指導の先端に立たれる事のいかに急務であるかを痛感させられるのであります。續つて場内の大本館を通じて大本教の本体に想到する時、其信仰團體として持つ元氣と、其合理的な主義主張に感嘆の外なく、必ずや將來其大をなすべきを信じられると同時に巧に時代をキャッチした點に驚かされるのであります。要するに既成各派が本博覽會を期と

して百尺竿頭更に百尺を加へるか、百尺の竿を根元から打ち倒して改めてスタートを切るか、何れにしる一大危機に直面して居る事を自覚され一層の努力を拂はれんことを希望する次第であります。

◆同月同日 同新聞所載記事

各派融和の

實を擧げ得た

刺戟となる大本の出現

宗教大博覽會參與 寺 西 講 學
知恩院門跡執事

空前の快舉と謂ふべき宗教博覽會は宗教都市京都の地に最も適切な施設であると共に、思想國難を云爲される現代に於て、幾分でも精神文化の向上に資し得たならば第一目的は達成せられたと謂つてもよい。由來京都の地各本山林立し、名藍巨刹を並べてゐるが何れも其の門戸を守るに汲々として、相互提携、教化戦線に奮闘するの機運乏しく、唯だ僅に護國團や日

校聯盟の『花祭』の外、特筆すべき何物をも持たぬ。

然るに本會の擧が傳はるや洛中洛外の各宗派本山は、競うて賛意を寄せられ貴重品の出陳あるのみならず平素門戸を鎖して他宗他門の窺知を許さざる東西本願寺を始め、各本山が擧つて堂宇庭園を開放し、連絡参拜に便せられる事となつた。殊に宗博第一会場内の布教館では、各宗派共名士を特派して思想善導、生活向上の講演法話の機会を得せしめ様とせらるゝ事は、佛教各宗派提携親善の上に於ても喜ばしい現象である。

更に基督教を始め、大本等の神道各派に於ても、夫々經費自辨で特設館、参考館を計劃實現せられ、佛教側と呼應して、教化戦線に邁進される事となつたのは、昭和聖代の餘澤とはいへ、本會を契機として相互融和の實を擧げるとに至つたものと確信する次第である。

最後に一言して置きたい事は大本館の施設である。其の建築様式の古雅典麗と、出陣配列の嶄新奇抜なのは、民衆教化に切實な眞剣味を展開してゐる。特に宗教家の立場から見ると、此の力ある施設が、既成宗教に對する偉大な刺戟となり相互發奮、民衆指導の意義を徹底し得たならば、本會としても亦豫期以上の成果であらねばならぬ。

○四月三日 中外日報所載記事

王仁と語る

(現在の大本教見物記) (三)

(承前) ○それから雨も晴れてしまったのを幸ひ、くぬぎの林をぬけて青年奉仕者の宿舍や参拜者宿舍や印刷所や人類愛善新聞社や花園、温室、銅版製作室、エスベラント研究所などを見せて貰ひ唯一の傳道所であり禮拜所である大本道場を見る、そこに中外日報社から贈られた『鎮國』(宮小路康文筆)の大部が掛つてゐるには、それを少しも知らなかつた私は驚かされた。涙骨先生は『どうだ見覚えがあらう』といはれるが見覚え所でない入社當時のなつかしい思ひ出の額であつたのである、それが大本教に貰はれて來てゐる。不思議な因縁話を聞いてゐる様な感じがした。

○扱て倉是から教主の居間へといふので月宮殿に隣した立派な建物の中に招じ入れられた。そして廊下間とおぼしい西洋造りの大廣間に通される、大會議室といふ型で立派な大テーブルを圍んで四十程の椅子が並べてある。こゝでいつも忝しく教主王仁三郎師と謁見があるのだといふ事は直ぐ想像される

○上の棚が一面書棚になつてゐて書籍がぎつしり並んでゐる、その書物が面白い、一冊五圓の國譯大藏經全完や宗教大講座がある外は大抵小説集で有島武郎氏や現代大衆文學集、近代詩全集、漱石全集その他である、しかも中々多方面である、その人格は書齋を見よといふ言葉を信ずるなら王仁三郎といふ人の多方面な趣味に生きて居る一面が教へられる。

○そこへ博文館に長くゐた御田村氏が這入つて來て中外讚美の辭で迎へて下さる。そこで色々教主を待つ間に博覽會の事や現勢を聞いてゐると、そこへあつさり教主王仁三郎先生が這入つて來られる『やア待たしましてすみまへんいつも有難う』(つゞく)

○四月初旬大正新聞所載記事

宗 博 新 聞

▽世界紅卍字教が大本教と提携した記念に中華民國から名士續々來訪▽宗博計畫が世界的だと賞讃の辭を寄せられるのは當事者も感激してゐる▽幾分か外交辭令があるとしても賞められて怒る者もない世の中滿更悪い氣もせぬ▽大本館正面に掲げてあつた出口聖師親筆の山越彌陀は去月來某信者が高價

なお冥加で拜受した爲其のあとへ聖師親筆の大達磨が掲げられ、宗博全館を
睥睨して御座る▽其の出口聖師が神がりの状態で西會場出陣中の神輿を買
上げよとの事▽側近に侍して居た中村主事が驚いて三上神具店の出陣場へか
けつけ此意を傳へると三上主人神意の程も畏しといふので時價七百圓を實費
の五百圓で納品した…(後略)… (筆者寺西聽學氏)

噴火口

▽宗博開館以來連日の好況は別項記載の通りであるが…中略…▽無論大
本教の進出が吾人の計畫に偉大なショックを與へた事は全く肝銘の外なく▽
加之其の堂々たる進出振りは他の追従を許さぬ處、王仁式独自の境地として
吾人の計畫を基礎づけた▽之に比べて遜色のあるのは佛教各派の態度で此の
絶好のチャンスに對岸の火災視し甚しきに至つては或種の妨害を加へられた
事だ▽唯、徒に漫然と什寶を陳列したに過ぎない各本山は、守衛や看守の人
件費まで負擔してゐる大本教に何の顔ありや…後略…(全氏)

噴火口 丹波の鬼も飛び出し

同月全日 人類愛善新聞所載記事

滿天下の注目を惹いた

古今未曾有の施設

先づ會場正面の偉觀

破天荒の計畫として喧傳された我宗教大博覽會は三月八日から六十日間京
都市岡崎公園と知恩院境内とで開會された。何がさて空前の快舉と云はれて
ゐる丈まづ第一會場入口にはローマの寺院建築に則る大石柱三基を立て神佛
基三教を意味する月輪、卍字、十字の各表章を頂点に掲げ金銀赤の三色映發
する處宗教博らしい氣分をそよる。

大本館 正門の西側には大本教が經費五萬圓を投じた特設館がある。建坪
四百六十坪、屋上に輝く愛の象徴『半月瑞雲』と外壁を彩る五色の横線とは
壯重典雅な建築様式と相俟つて新興勢力の濺瀾さを思はせる。殊に同館内に
於ける出口聖師の親筆書畫千餘点と各種参考資料の目新しい陳列振りとは衆
目を惹くに充分。奥には祭壇を設けて入場者の自由參拜に資するなど萬事抜
目のない施設。…(後略)…

四月四日

於高天閣

四方の山薄らかすみて風清く小鳥も道の千代唄ふ朝
 湯に浴りて鼻下の八髭剃り落し神輿に神靈遷し奉りぬ
 月宮殿前庭に立ち使丁等と神輿の前にて小照を撮る
 出雲より活動寫眞機持ち來り神輿度御ます狀をうつせり
 明月氏秘藏の獅子頭今回の神輿度御の隨行仕ふる
 午前九時神靈いよく神輿にて大祥殿に神幸坐します
 大祥殿神の御前に玉串を謹み敬ひ奉り了へぬ

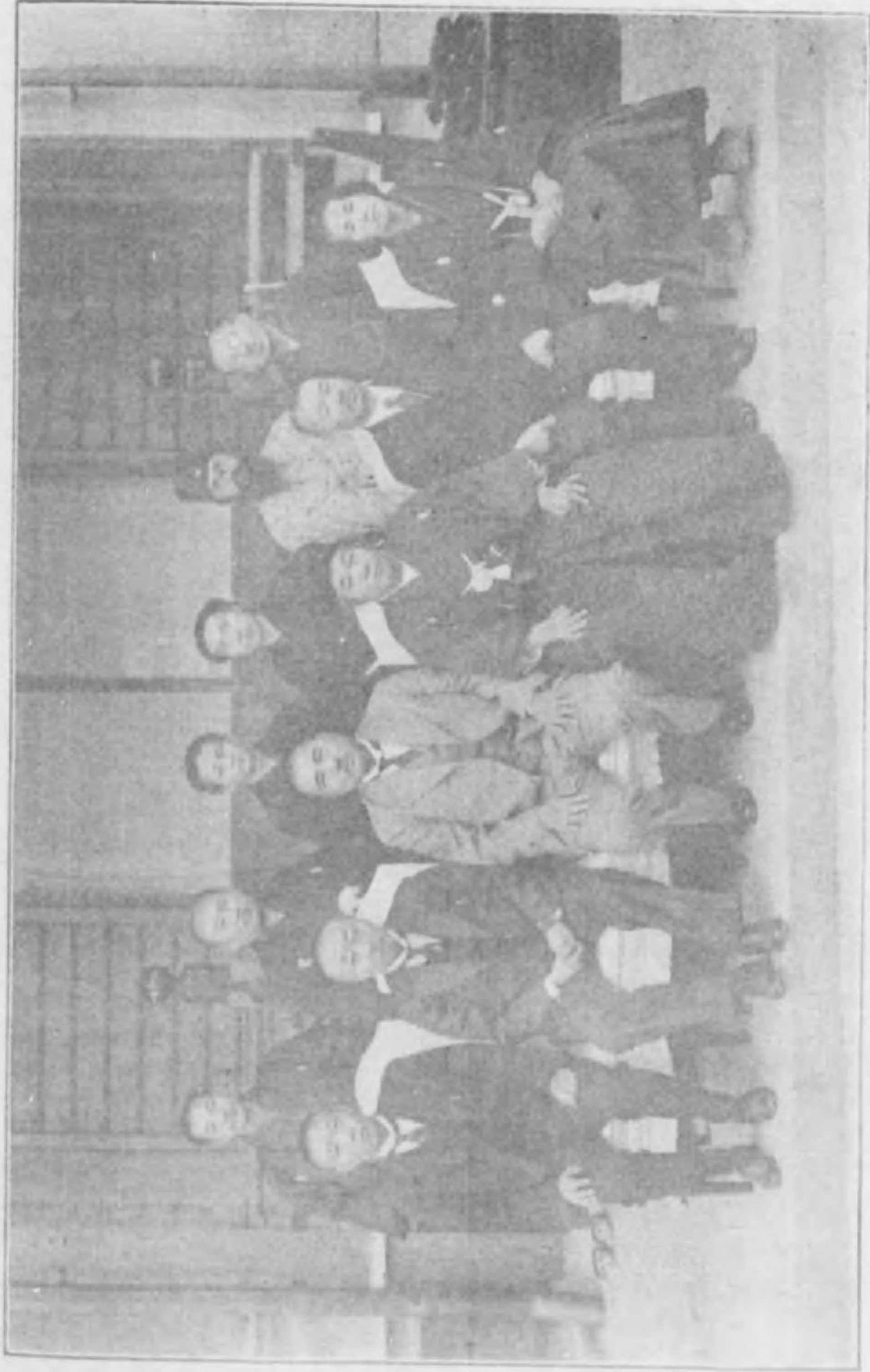


神聖は出は頭先 御遊の輿神り大祥宮月

神靈は神輿に召して月宮の御殿に安く歸御ありたり
 月宮殿祭典終り巡拜の信者に一々神饌餅與ふ
 御神輿は再び瑞月門を出で神苑隈なく神幸ありけり
 高天閣乙女の弾ける入雲琴音さえ渡り長閑なる御祭

○作歌 春 野 (九首省略)

午後三時神輿はいよ／＼月の宮殿内深く還御ありけり
 午後一時大祥殿の宣使會に出席暫時挨拶を爲す
 珍らしき支那の珍客來訪し張月宗匠と時事を談ぜり
 牧野氏も共に來りて高天閣應接室に歡談を爲す



(左中央)氏昌宗張と(右中央)御聖皇出るは於に御園大高

張宗昌、黃錫齡、劉智銘、牧野千代藏氏一行と王仁、日出廣、宇知廣、岡田和厚、井上圭理、御田村、北村等高天閣にて應接談話す。

○
大祥殿宣傳會に相のぞみ一場の演説試みしかな
夜に入りて明光殿の巻開き天國氣分漂ひにけり
大祥殿信徒あつまりエスベラント大會餘興賑ひにけり
如月氏に送られ月光寮に入り地上天國五枚仕上けし
徹夜して漸く五枚描き上げ終れば既に曉鳥啼く

○昭和五年みろく大祭概況

▲天 恩 備

大祭第四日 (四月四日)

未明五時半より大祥殿に於て平松大祥殿主任先達にて朝拜があつた。昨夜の中に綾部より参進された人達で、周囲の戸を開け放つた程の参拜である。

朝拜終れば、朝の光が四圍に漲つて今日の大祭日和を豫感する。――たがはず、當日は絶好の日和に一日恵まれて居た。

八時半、齋主字知磨様を初め祭員一同月宮殿に入りて報告祭あり、それより月宮殿から新調の神輿を御出ししてうや／＼しく月宮殿下の廣庭にお据ゑし、こゝにて先刻よりお待受けして居た天恩郷の青少年二十名によつて大祥殿に渡御されることになった。聖師様、日出廣様には是に隨はれ、平松齋主補、小竹氏御先導を申受け、祭員一同聖師様に續いた。先づ月宮殿前にて聖師様のお言葉によつて神様のお喜びを表象し、五六七の調子にて十八回、請摩

と共に神輿は高く翳された。猶明光殿、光照殿、宣靈社、時習部、智照館、最後に大群殿前にて同じくおもみし、九時半大群殿にお渡りになり、廣間の右方にお鎮まりになった。祭員一同は神輿に續いて着席、愈々大群殿のお祭に移った。

大本の大祭に神輿をお出しすることは、今回これが最初であつて、聖師様には先日來この事を非常に喜ばれ、今朝は夜半二時、御一人にて御神靈をお鎮めされたのであるが、月宮殿にて初めて白丁の青少年等のお擔ぎするや、聖師様も自ら肩を入れられたり、神輿の美麗にして莊嚴なるを稱へられたりされた。思ふに現神國の三界をしるし召す月の大神様が、畏くも苑内を限なく渡御あらせらるゝと云ふことは、こゝに重大、深遠なる神祕の存することであらねばならないのである。

○
九時半より珍しく紋付を召された聖師様及日出磨様御臨席のもとにうや／＼しく大群殿のお祭が執り行はれた。

齋主 出口宇知磨様、同補平松大群殿主任、祭員中野、山内、村上、岩澤、一瀬、新(幸)、木田、瀬尾、井上(功)の諸氏。玉串捧呈——聖師様、齋主、大本總裁井上留五郎氏、宣傳使代表岩田久太郎氏、天恩郷役職員代表櫻井八洲雄氏、参拜者代表東島威之吉氏。聖師様の御先達にて神言奏上、宇知磨様の御聲に和して御神歌を奏し、十時半祭典を終つた。莊嚴なる祭典——八雲琴の妙なる音響に酔うて、参拜者一同は天國にある感を更に深ふした。

○
祭典後、少年二人の手に持たれた小獅子と春駒が神輿の御先導をつとめ、祭員之に隨つて再び月宮殿にお歸りになり、月宮殿の祭典が舉行された。玉串捧呈は聖師様、齋主宇知磨様及一般参拜者代表井上總裁。

祭典後郷内の巡拜あり、宣靈社のお祭があつた。一方には三度苑内くまなく神輿の渡御があつて、一同は大群殿の直會に臨み、聖師様、日出磨様に續いて御神酒、おこわを頂き充分

なる歌をつくした。

一時すぎ、聖師様は春陽亭上に上られ、こゝより遙か下なる廣庭に集まる人々の上に餅をおまきになつた。老若男女は己を忘れてこの賜を得んと懸命である。——歡聲上り、拍手響くこの溢るゝ稚氣こそ、聖師を慕ふ人々の心がそのまゝにうかゞはれて快い。

一時半頃より大祥殿に於て宣傳使會合あり、續いて人類愛善會支社主任會合が催された。又一方明光殿では和歌冠句の開卷あり、これに集る人、光照殿なる御作品を觀る人、二時より苑内を練り歩かれる 神輿に従つてこれを拜さるゝ人——天恩郷は麗かな春陽の下にみろく大祭の氣分が横溢してゐる。

因に神輿は左進右退の順序にて苑内を練られ、各建物の前には五六七と十八回もまされるのであるが、青少年の澁潮たる意氣と共に、從來の森嚴莊重なるに加へて活氣漲り、一段と神々の御勇みが思はれるのである。

夜七時より大祥殿に於て海外宣傳の報告、エス語雄辯會及餘興がにぎ／＼しく開かれた。

最初に櫻井宣傳課長の開會の辭あり、それより海外に於ける大本の發展の報告、兩聖地青少年の會話雄辯餘興などあり、又各國人に扮せるエスベランチスト交々立つて所感挨拶を述べ大本エスベラントの爲に大いに氣を吐いて、最後に宇知磨様の開會の辭あり十一時散會した

宣傳使會合に於ける

聖師様のお話

大祭第四日於大祥殿

御遠路のところ宣傳使諸氏には御來會に相成られました御苦勞さまであります。今井上總裁から何か話をして呉れといふ事でありましたが、別にこれというて申上げる事もないし、言ひかけたら中々二時間や三時間ですまないものですから、極く簡単に自分の感じた

事を申上げて置きます。

宣傳使といふ聖職は非常に尊いものであつて、これは地上のみならず永遠無窮の天國迄響いて居つて、所謂天國にも籍があり、靈國にも籍があるのが宣傳使であります。靈國に籍があれば無論媒介天人といふことになつて居るから天國にも籍がある。それで常に言行心一致といふ事に注意して貫はねばならぬ。

宣傳使の一言一行は燎原の火の如きものである。一本のマツチを以て千里の原野を焼く如くに、宣傳使一人が言葉をあやまつたならばどれだけ悪い影響を及ぼすかわからぬ。又宣傳使の言葉が良かったならば、その言葉によつてどれほどよい効果を齎すかわからないのであります。その通り言葉のみならず行ひも同じ事であります。

あの回々教の教祖マホメットがメツカ市で四十になる迄驢駝を曳いて、今で言へば馬方のやうな事をやつて居つた。それがメツカ市に於て始終基督の話を聞いて居つたが、靈感をうけて自分は救世主であるといふ事を知り、直ぐに郷里へ歸つて驢駝賣りを止めて了つ

て、自分は本當に救世主であるといふ事を名乗つた時に、その村中の人は或は親族、知己朋友迄が馬鹿にして、誰も相手にならぬ。マホメットは氣違ひになつたと云つて非常に攻撃をしたのであります。

その時第一マホメットの困つたのはマホメットの妻君であります。妻君がどうしても、かうしても信じない。一番に夫の美點を知つて居るのも妻君であり、弱點を知つて居るのも妻君であります。そこでこの妻君がこんな人になに神様が懸るものかといつて非常に攻撃した。その時にマホメットはこれは肝腎の家内が自分を神様の如く手を合はす様にならなければ天下に主張しても駄目だと思つた。それでマホメットは妻君の前に行く時にはまるで帝王の前に行く様に、或は本當の生きた神様に仕へる如くに、そして淨玻璃の鏡の如く自分の言行心はこの家内にうつる、家内にうつる如く天下にうつるに違ひないから、どうしても家内が自分を神様だといふ所迄氣ばらねばならぬと覺つた。

所が愈々十年目に妻君が、自分の主人は本當に神様ぢや神様ぢやと言つてふれて歩く様

になつた。それからマホメットが今日の大宗教を開いたといふ事があります。それで女の宣傳使は夫が感心する様に、男の宣傳使はその妻君が感心する様に、神様の様に思ふ所迄の言行心一致の行動を取らねば、何時迄かゝつても本當の道は開けないと思ひます。モウ今日はこれ位で失禮します。(速記者 伊藤榮藏)

○宗教大博覽會大本特設館より

四月四日(第二十八日)

雨氣を含んだ風が吹く。曇りがちの日である。

花見を兼ねてか平日にかゝらず來館者が多い。然し凡てが上ツ調子でどうも落着きがない今日はこれといふ批評もなく。平凡に一日が暮れる。宣信徒の姿が相變らず來館者の二割を占めて居る。

入場者總數 七九三五人。

▲觀客の批評

『大本は全然潰されて了つたものだと思ひ込んで居たので、今度の博覽會に大本が盛んにやつて居ると聞いても、只迫害を受けた當時の受難史を陳列した位だと思つて居ましたが、イヤ全く驚きました。大したものですね。海外宣傳の現状を見た丈でも随分驚かされました。實に意外です』と話した人があつた。

四月五日

於高天閣

朝の空隈なく晴る、神苑に祝詞の聲の澄み渡るなり
 明光殿玻璃戸を徹す朝の陽の光うらゝに風匂ふ朝
 久原氏の一行凡て十一人自動車三臺並べて來訪
 高天閣應接室にや、しばし休憩の後秋月亭に入る
 光照殿展覽會を一巡し神苑巡り高臺に上る
 秋月亭に南桑原野を瞰望し一行と共に晝飯を攝る
 春陽亭二階に上り四方山の櫻を見たり一行残らず



て村原大高氏厚久と御座り



文珠支利菩薩

出口聖師筆



行一氏原久と御聖るけ於に苑内殿宮月

心事の雄大なる事弟くの及ぶ事
 子ありず 實に多うらゝき
 偉人たる全 次山曲

高天閣玄關及宮側に立ちて記念の小照を撮る
 一行は保津の絶景眺めんニ二隻の船にて溪間を下る
 一時四十分時間費やし嵐山龜山下に船を捨てたり
 渡月橋畔にて互に袂別し六時嵯峨發歸郷せしかな
 黄昏れて上野公園訪ひ來り明後八日の下阪を促す
 頭山翁筆に成りたる大書軸上野落合二人より贈れり
 頭山翁の書に曰く

「心事の雄大なる事万人の及ぶ所にあらず、實に奇らしき偉人なり」云。

○昭和五年みろく大祭概況

▲天 恩 郷

大祭第五日（四月五日）

大祥殿に於てお祓を受け午前八時より玉の井参拜者は三々五々南桑の春を親しみつゝ行く午前九時半聖師、日出磨師、壽賀磨師、宇知磨師自動車にて小幡神社に着、直ちに祭典行はれ聖師の先達にて一同神言を奏上、終りて供物のおさがりを頂き、聖師の御生家の玉井社の大神様及上田家祖靈に参拜。玉の井社も漸く造営の歩につき地域の整理等も始められてゐるがこれと同時に穴太村民も積極的厚意を見せ、本年は戸毎に十曜の神旗を掲揚して此の日を意義づけてゐたのは心嬉しかつた。同じく聖師の先達にて神言奏上、おさがりのお神酒を頂いて随時歸途につく。

○宗教大博覧會大本特設館より

四月五日（第二十九日）

早朝から宣信徒の來館に一同少からず目を廻してゐる。樂燒所のあたりは通行もならぬ程に雑沓し、未信徒の人達には樂燒をお断りするといふ有様である。

『茶色がありませんよ——筆をかして下さい——』大騒ぎ。机を幾つ出しては足りないと、書きたい人も餘りの混雑に順番を待つてゐるといふ始末である。

吟月、崎月兩女史の外に御手傳二三人が廻つてゐるが、逆も忙しい。今日は全く大本デーである。山陰線の列車が着くことにとん／＼殖えて行く。

『大本は地理的に實によく進出してゐるね、兎に角これだけ一人でやるんだから大したものだ』

と感心し乍ら本館へ足を向ける人や『殆んど女ですわね』と云ひ乍ら淨瑠璃を語つてをられる聖師様の御寫眞を見てゐた人があつた。

入場者總數 七九二九人

○四月五日「眞如能光」掲載記事

○和歌山縣長谷毛原支部より

二月十六日聖師様二代様には紀伊別院竣成式に臨場の際、當長谷毛原支部へお越し下さる事となり筆者一同を代表して生石口迄御迎へした。やがて御一行は二臺の自動車に分乗して小生宅へ到着。一同と共に記念撮影あり支部へ参拜さる。御歸り後御揮毫數十枚に及び、特に私の爲高さ一間の六枚屏風に鳥三十五羽を描かれ、王仁と署名のもとに王仁の字形に三十の捺印を捺して下された。夜は村民の聖師様に面會を求むる者多く宿舎狹隘なるため門に立つ者數百名に及びいづれも敬虔そのものであつた。此の日二代様も揮毫され面會者に一々菓子と蜜柑を下された。翌朝聖師様は私の小供二名に人形を下され、午前六時の自動車にて御出發。石井邦氏は聖地まで御見送りした。

かゝる山間僻地にも拘らず、お越し下されたことを厚く感謝致します。(石井義一報)

○御 作 品 展

埼玉縣比企郡松山町

期 日 三月十二日 十三日 二日間

入場者 第一日 自午前八時至午後六時 一〇八〇名

第二日 全 右 五五〇名 外に小人 四五〇名

總 計 二〇八〇名

會 場 松山町齒糸組合市場

主 催 比企支部 川島支部

松山町は久しく交通機關に恵まれない半商半農の小邑にして戸數約千を數へるに過ぎず、一同作品展覽會の結果を氣づかつてゐたが、宇城宣傳使の熱誠と、川島支部員の熱烈なる援助により豫期以上の好成績を擧げ得たるは全く御神恵の賜と一同感喜に堪へない次第である。

第一日は春日和、第二日はそれに反して終日大雨にも拘らず多数の入場者のあつた事は如何に人氣の沸騰せるかを思はしめた。殊にこの日町長を初め町村の有力者を網羅してゐたのは一層吾々を緊張せしめた。御作品に對する風評は他の開催地と大同小異にして何れも驚嘆せない者はなかつた。

ある中老人風の男は朝早くから夕に到るまで聖師のお歌を一首も残さず寫し取つて去つた又感に打たれて去りかね終日留まりし人多く御作品の分與を希ふものも數多あつた。中には展覽會終了後ミロク像を是非欲しいと電話をかける人もあつた。(比企支部報)

石川 縣 能 美 郡

石川縣御幸支部は從來淨土眞宗側からの壓迫甚しく、その爲新入信者が偶あつても之に對抗出來ず、時節を持つ有様であつた。然るに舊風日出磨練巡教の際「こゝで展覽會をしたらよいな」との御言葉にて、當地方信者諸氏所藏の總裁御作品百點ばかりを蒐め、去る三月十五日鎮守春季祭を機として支部所在地の元鳥口醫院跡で作品展を開かして頂いた。前晚遅くま

でかゝつて陣列をすましたものゝ果して村民達が來て呉れるかどうかを案じつつ寢に就いたのは午前三時であつた。

朝定刻八時になるや入場者が待ち兼ねた様にして押し込む騒ぎ、午前は地方に於ける有識階級多く、午後は一般村民續々詰めかけ大澤大聖寺支部長 瀬領苗代支部長に筆者の三名が大車輪となつて説明に當り、熱心な人は三回位出入して立去り難き風情を示し、眞宗信者の老人連と雖も聖觀音像の前には合掌し彌勒様の出現由來を聞いて感に入る有様にて、主催者側の三ツ野支部次長は多年の壓迫に堪へ來ただけに感慨無量嬉し涙を流してゐた。夕刻までの入場者大人四百二十名、小人百六十餘名を算し、初めての試が大々的成功にて終らして頂いた。大本に對しあらゆる迫害を加へた人達も聖師様の御作品を目のあたり拜し本當に彌勒様に違ひないと噂する狀、恰も隔世の感があつた。別室には熱心な求道者に對し座談的に大本の概要を話したが相當の反響があつた。斯くして眞宗の人々にも漸次理解され得るやうになつたのも偏に日出磨練の御指示の賜と感嘆致しました。(鳥田靖洲報)

○道院だより

世界紅卍字會

赴日團來院記

三月十五日 晴

夕霧煙れる神戸驛頭に入り来りし上り急行列車が停車するや、梁慈果氏を團長とする世界紅卍字總會赴日團の一行十名は徐ろに下車された。此日本部より出迎への爲來神された井上總裁、北村隆光氏をはじめ、神戸在住信者數十名は手に／＼紅卍字旗を振り囂して歓迎した。昨秋以來顔馴染の方多きため其處此處に親しく握手が交換される。一行は直ちに自動車を驅つて神戸道院に向ひ、禮拜の後ヤマトホテルに落ちつかれることゝなつた。

因に一行の此度來朝したのは御神命に依り京都市に於ける宗教博覽會視察の爲めであつて團長梁慈果氏、副團長周根淨氏を初め劉承中、王承宴、侯又誠、唐定敏、孫昕光、金誠徳、那祥志、西川尋化の諸氏である。

三月十六日 晴 後小雨

午後零時半より道院階上にて開沙あり一時半に及ぶ。日本に於ける一行の旅程も之に依つて決定された。次で西川尋化氏起つて今日の壇訓の譯述を試みられ、後同氏の通譯に依り梁團長の挨拶があつた。其の中に曰く『日支親善は唯單に名のみであつてはいけない、必ずやその實を擧げなくてはならぬ……』

夕六時より例により神海樓に於て歓迎晚餐會を開催。會するもの主客合して四十餘名に及んだ。先づ日支道友の健康を祝する乾盃に始まり、井上總裁の挨拶、梁團長の謝辭あり宴酣なるに及び清水氏及び岡田氏の追分節 伊賀、村松兩夫人の舞すくひなど あつて興を添へた。この時團長起つて演者に對し酒杯をさすなど鮮かなる外交振を見せた。

三月十七日 晴

正午開沙、終つて西川氏の通譯により副團長周根淨氏の壇訓の譯述があつた。夜は井上總裁、北村、京谷の三氏、一行の招待により晚餐會に列り、終つて一行を娛樂場へ案内した。

三月十八日 晴

午前九時二十三分發にて一行は京都に向はれ、當地在住信者は神戸驛に見送つた。

(西村寛之助報)

紅卍字會一行を

京都に迎へて

今般來朝の支那紅卍字會幹部團長梁蕙果氏以下十名の一行は神戸より三月十八日午前十一時二十一分出迎への井上總裁、北村宣傳使と共に京都驛着、京都分院にて少憩後、午後二時より宗教博覽會見物。此夜大學病院前丸屋旅館に宿泊、翌十九日正午より分院内京都道院に日程の扶品開沙され、壇訓出づる事時餘に及び、午後二時より畫齋壇出で日本各地總院道院等に下賜の書畫がかゝれた。京都道院は『中道而立』の書を頂き、又宗教博覽關係の各信者個人も夫々書を頂き、一同靜齋裡に拜觀して、終了せしは午後七時。宇知府様にも此日御臨席ありたり午後七時より新三浦に於て一行十名の歡迎會を催し、大和博士日本側を代表して一行來朝

の勢をねぎらひ「神様の御道の下に日支人打交り衷心より打解け親善の實を擧ぐるは歡喜の至りである。吾々は從來四海同胞といふ言葉は單に一つの理想として思考し、其實現果して何れの日なるかを判別出來ざりしに、神様の御道によりて初めて其實現近きにあるを知つた。日支兩國の親善は其第一歩なれば益々御互に相はげみ親善交驩の實を擧げたい」と纏々陳述後團長梁氏立つて本日の歡迎を衷心より感謝され「支那には處世中和といふ言葉がある。此中は支那の意味にて和は日本の意味で、日支親善の眞實績舉りて初めて世に處する所以となり、乃ち世界平和の實現は先づ日支兩國の心からの提携親善から初まる事をお道によりて知つたこれによつてもお互寔に重大なる責任がある故、益々其實現に努力したい。今後はどし／＼日本からも支那を訪問されて相互に意志の疏通を圖りたい」と纏々陳述あり、後主客打解けて乾杯し名實共に親善の喜びに浸り散會せしは九時過であつた。

因に一行は廿日市内各所を見物され、廿一日龜岡へ參向された。

(山内勇二報)

鹿 兒 島 縣 大 島 郡

二月廿五日 曇

朝から十曜の旗が名瀬分所の門前に掲げられた。分所の内外は掃き清められ庭には信徒によつて運ばれた日砂利がしかれてゐる。古仁屋分所、笠利方面六支部、御神山、當名瀬分所の信徒五六十名午前十一時頃一行を出迎ふため旗を持ち相前後して海岸に向ふ。誰の顔にも包みきれぬ喜びの色が漂つてゐた。

井上總裁、山口別院管事、並びに支那道院李天真、夏椿年、西川那華秀、奉天分所長西島宣道諸氏の一行は午後一時半名瀬分所へ到着少憩の後井上總裁は道院、紅卍字會の門札を書かれ、三時頃より道院の御神位を鎮祭された。祭典後分所の門前にて一行は名瀬、笠利、古仁屋の信徒五六十名と共に名瀬道院、世界紅卍字會名瀬分會設置の記念撮影をなす。

夕拜後季氏、井上總裁より御話しあり。終つて記念の半折を名瀬道院を初め、古仁屋分所御神山、手花部、赤木名、父濱、用安、平、打田原、名音の各支部及び四名の宣傳使に下さ

れた。

總裁は十二時近くまで道院の神饗を奉齋され、分所支部の門札を書かれて、阿久根分所長宅へ向はれた。

二月廿六日 曇

午前八時過ぎ一行は自動車にて古仁屋分所長西田富四郎、伊東義一氏と共に古仁屋へ向け出發。

午後一時過ぎ古仁屋分所着、信徒約三四十名出迎ふ。直ちに祭典にかゝり、後古仁屋道院、世界紅卍字會古仁屋分會設置記念の小照を撮る。午後二時過ぎ一行は信徒の見送る中を自動車で出發、午後七時過ぎ御神山支部に到着、道院の御神位鎮祭の後記念の小照を撮るまもなく一行は井上總裁と共に阿久根分所長宅を訪問された。夏氏は「道院を一ヶ所設置させて頂くつもりだつたのが来て見ると次々に五ヶ所も設置されるし大嶋はどうも神縁の深い所である。それにつれて邪神の方でも非常に妨害をする様に感じさせて頂いた。今日も古仁屋

往復に自動車が悪々故障して一行の行途を邪魔したが、龍神の御加護で無事に歸り着いたわけ、神界の事は大島を通じて歐洲へも響く」と話されたに對して總裁は、意味は違うが結局は同じだと話された。

二月廿七日 曇

朝八時半宣信徒の見送る中を、共上總裁並に支那一行は名瀬分所を出發して、午前十時半手花部支部へ安着、平、父濱、用安、喜瀬、打田原の各支部長、老若男女の宣信徒約四五十名出迎ふ。祭典後道院設置記念の小照を撮り同支部庭前の榕樹が珍らしいので總裁を始め一行六名は別に撮影をされた。

一行は宣信徒十数名と共に正午赤木名支部へ到着。赤木名支部長三井甚助氏を始め宣信徒十数名お迎へされた。少憩の後、祭典に移り終つて支部を背影に撮影。午後三時名瀬に向け出發、一同お見送りした。

午後五時名瀬道院着、南、榮雨氏その他一同出迎して御神山へ案内す。御神山は先年 聖師

様が御來嶋なされた時、伊都能賣大神を鎮祭された所である。總裁先達にて一同祝詞を奏上し、一行は宿へ歸られた。夜名瀬分所でお禮の後、奉天分所長西島宣道氏の御神徳談を聞き一同多大の御神徳を頂いた。それより十二時まで阿久根分所長宅にて總裁よりいろ／＼お話を承る。

二月廿八日

早朝より雨中を宣信徒一同は一行を海岸迄御見送りし、南泰淳、榮實英、米喜英、乾養寛坂本勇吉、岡山保、本郷清の諸宣使は基隆丸まで御伴した。
(名瀬分所報)

◇四月五日 丹波毎日新聞所載記事

教外に始めて

神筆を揮ふ

昨日入場者三千五百

王仁氏の席上揮毫

四月三日の綾部三ツ丸は東京京都の展覧會に一枚も揮毫せなかつた大本教主出口王仁三郎氏が畫筆を揮ふといふので展覧會の觀衆殺到し、午後二時前後は全店内身動きも出来ぬ程で終日の入場者三千五百を突破した。出口氏は午後一時より特別室にて色紙短冊半折等三百五十枚に其の神筆を走らせ頗る上機嫌で午後四時半本部へ引上げたが觀音像、山水其他約三百枚は既報の通り五日正午より同店にて厳正なる抽籤を行ひ適呈するが、案内狀及本紙刷込の入場券持参の方は五日正午までには是非入場され度い。

◇四月五日 中外日報所載記事

王仁と語る

(現在の大本教見物記) (四)

(前承) ○満室にあつた氏が我々が待つてゐるといふので急いで歸つて來

たといふこなし、全く息ぎれがする程に「あゝ点ら〜」を繰返しさも疲勞した様である。それでも大きな正面の椅子に大きなノンベンだらりな身體を据ゑ人を外らさぬ應接振である。是から王仁氏と宇知廣氏を中心に座談に移る社員「博覽會は全く大本教の博覽會といふぢやありませんか」宇知廣「苟くも宗教博覽會といふのですから競うて各宗がその特徴を出すだらうと思つてゐたのですが随分あつけないもので今になると馬鹿を見た様な氣がします、しかしお蔭で私の方が引き立つた譯です。初め佛教方面は古いものが出るだらうと思つて、勿論私の方には古いものがありませんか極く明るくやらうと思つて努力した譯です、そして初めに世界的大本教を出したのは大正八年以來何をしてゐるか御存じない人のために大本教に對する注意を新たに爲にやつた仕事です」王仁「初め頼みに來た人が天理教その他の神道が出すからどうかといふので出した譯やが何にも外は出てまへんなア、それで神道は大本教だけといふ形やハ、ハ、ハ、」宇知「あの博覽會でその筋からも注目され又注意をされましたが、然し一般の批評が聞けるのが面白いです、奇抜なものは報告する様にしてありますので随分面白いのがあります」

王仁「この間もわしが幕の内に居たら宗教即藝術、宗教即政治と書いてあるのを見て「やつぱり王仁三郎つて無學な奴やナ、宗教即藝術やなんて馬鹿なことと言ふとる」つて喋舌つてゐるのを聞いた、愉快なもんや、あれは造化の表現が藝術だといふ意味やし政治にまで行けぬ宗教は眞の價値なしといふ意味なのや、それを邪魔臭かつたから即とやつたのやハ、ハ、ハ、」

社員「會場内の説明は手に入つたものですなア」

字知「信仰を強ゆるな、自由に見て貰ふといふ意味でなるべく説明をしない様にしてゐるのです、只間違つた見方とか尋ねる人に説明するだけなのです」

王仁「で畫の解説などもわし的事を、されるとか、あられるとかの敬語をやめて呉れといつてゐるのや、師とあるのも呼び捨てにして置けといふてますのや」

社員「あの畫傳は新らしくお書きになつたのですか」

王仁「東京から歸つて來たら信者の畫家に描かしても間に合はぬといふのでゴテ／＼云つとつたから「わしが書いたる」つてガ／＼と書いたつたんや一日に二十枚位何んでもあらへんがナ、氣のりさへしたら何百枚でも書いたる」

字知「まだあれに並び切らないのですから並べませんが二百何十枚となるの

庚午日記三の巻終

です」

王仁「それでも専門の畫家はよう見るなア、大正八年初めて畫を書いた時の大きな屏風の松の畫を見てあれは止めた方がいゝ、あれは打こはしや、今のと大分違ふといふのや、やつぱりよう見るは」

社員「師匠なしといふお話ですが觀音や達磨など素人と思へませんナ」

王仁「觀音と達磨だけは大分前から稽古したもんや、子供の時分には習つたこともある、實は畫師の月樵がわしの叔父にあたるのでよく遊びに行つてはわしも描いたのや、それで觀音や達磨は皆月樵の畫が手本や、その外のものは二三年前からや、これはほんまに我流やハ、ハ、ハ、」(つづく)

庚午日記三の巻終

庚午日記三の巻終

昭和五年九月一日印刷
昭和五年九月一日發行

庚午日記三の卷奥附
定價壹圓

不許複製

編輯兼發行者 第一 天聲社
京都府何鹿郡綾部町大字本宮村字東四ツ辻十三番地
【振替大阪六〇五三四番】

印刷者 瓜生 鏢吉
京都府南桑田郡龜岡町大本天恩郷内

販賣所 第二 天聲社
【振替大阪七五九一七番】

終

